

長野県松本市

TAKEBUCHI

竹湊遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1996.3

松本市教育委員会

長野県松本市

TAKEBUCHI

竹湊遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1996.3

松本市教育委員会

序

松本市南東部に位置する寿地区は、弥生時代中期終末期の標式遺跡である百瀬遺跡をはじめとして多くの遺跡がある地域です。竹瀝遺跡もそうした遺跡の一つとして知られていました。このたびその一帯に土地区画整理事業が及ぶことになり、文化財の保護を図るために松本市が竹瀝南土地区画整理組合から委託を受け、松本市教育委員会が竹瀝遺跡の第2次調査として緊急発掘調査を実施したものです。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた（財）松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成6年6月から8月にかけて行われました。作業は梅雨、記録的な猛暑となった夏期におよびましたが、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、弥生時代の竪穴住居址12棟、掘立柱建物址7棟といった遺構を発見し、また同時代の貴重な遺物も多数得ることができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われまます。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査には、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾の中で、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通して貴重な文化財の保護とその施策へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、過酷な状況のなか発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた竹瀝南土地区画整理組合の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

- 1 本書は、平成6年6月6日から8月31日にわたり実施された、松本市寿北6丁目（平成7年10月30日住居表示実施。発掘調査時は大字寿白瀬淵）に所在する竹瀝遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成6年度松本市竹瀝南土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市が竹瀝南土地区画整理組合から委託を受け、松本市から再委託を受けた財団法人松本市教育文化振興財団（市立考古博物館）が実施、本書の作成・編集も行った。なお、業務委託及び再委託にかかる事務処理については松本市教育委員会が担当した。
- 3 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章：事務局

第2章第1節：太田守夫

第3章第1節・第3節1-(3)：竹内靖長

同第2節：近藤 潔・澤柳秀利

同第3節1-(1)・(2)、2：直井雅尚

住居址一覧表・建物址一覧表：竹内靖長

土器一覧表：直井雅尚

石器一覧表：高桑俊雄・直井雅尚

上記以外：澤柳秀利

- 4 本書の作成・編集にあたっての作業分担は次のとおりである。

遺物洗浄接合：上条尚美、倉科祥恵、小松正子、堤加代子、丸山恵子、村山牧枝、欠崎寛子、渡辺よし子
土器・陶器実測：大城よしの、竹原久子、松尾明恵、MIN AUNG THWE

土器・陶器トレース：竹原久子、松尾明恵

石器・石製品・土製品実測：高桑俊雄、堤加代子、村田昇司、望月 映、吉沢克彦

石器・石製品・土製品トレース：村田昇司、望月 映、吉沢克彦

遺構図調整・整理：赤羽包子

遺構図トレース：岡嶋八重子

図版組み：荒木 龍、澤柳秀利、竹内靖長、竹原久子、長峰和正、松尾明恵、吉沢克彦

写真撮影：柴 秀毅、竹内靖長、三村竜一（遺構・現場）、宮嶋洋（遺物）

総括・編集：澤柳秀利

- 5 遺構図（第6図～第12図）の土層記述については第1表（9頁）掲載の略号を用いた。
- 6 石器の石材鑑定については、大型品は太田守夫氏、小型品は森義直氏にお願いした。
- 7 本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって次の方々のご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

桐原 健、小山岳夫、佐々木 明、千野 浩、寺島孝典、樋口昇一、山下誠一、山田真一

- 8 本調査の出上遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館に収蔵されている。（松本市立考古博物館 〒390長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710）

目 次

序	
例 言	
目 次	

第1章 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	3
2. 調査体制	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の立地と地形・地質	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	
1. 住居址	11
2. 掘立柱建物址	14
3. 土坑	15
4. 溝址	16
5. ビット	17
第3節 遺物	
1. 土器・陶器	
(1) 縄紋土器	18
(2) 弥生土器	18
(3) 中世の土器・陶器	23
2. 石器・石製品・土製品	23
第4章 調査のまとめ	34

図目次

第1図	基本土層	5
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡	7
第3図	調査範囲	8
第4図	遺構配置図	10
第5図	弥生土器器形一覽	19
第6図	第3～5号住居址	35
第7図	第6・12号住居址	36
第8図	第7・8号住居址	37
第9図	第9・10号住居址	38
第10図	第11・14号住居址	39
第11図	第13号住居址、第3・6号掘立柱建物址	40
第12図	第4・5・7～9号掘立柱建物址	41
第13図	上坑・溝址	42
第14図	土器・陶器(1)	43
第15図	土器・陶器(2)	44
第16図	土器・陶器(3)	45
第17図	土器・陶器(4)	46
第18図	土器・陶器(5)	47
第19図	土器・陶器(6)	48
第20図	石器(1)	49
第21図	石器(2)	50
第22図	石器(3)	51
第23図	石器(4)	52
第24図	石器(5)	53
第25図	石器(6)	54
第26図	石器(7)	55
第27図	石器(8)	56
第28図	石器(9)	57
第29図	石器(10)	58

表目次

第1表	土層略号一覽	9
第2表	竹測遺跡遺構別石器組成一覽表	27
第3表	住居址一覽表	28
第4表	建物址一覽表	28
第5表	土坑一覽表	29
第6表	出土土器一覽表	30 ～ 31
第7表	出土石器・石製品一覽表	32 ～ 33

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経過

竹洞遺跡は、昭和60年に県営ほ場整備事業に伴って松本市教育委員会により発掘調査が行われ、中世の竪穴住居址2軒、掘立柱建物址2棟、水田址等が発見されている。今回、竹洞遺跡の南半分が松本市竹洞南土地区画整理事業用地に含まれ、破壊されるおそれが生じた。そこで、松本市教育委員会では施工範囲内に存在する埋蔵文化財の保護について、松本市竹洞南土地区画整理組合と協議を重ね、平成6年度に当該遺跡の緊急発掘調査を実施して記録保存を行うこととした。平成6年5月9日付で同組合と埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を開始した。

2 調査体制

(1) 調査団

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 三村竜一、竹内皓長、柴 秀毅（松本市立考古博物館）

調査員 太田守夫、佐々木明、竹原久子、松尾明恵、三村 肇、宮嶋洋一、望月 映

協力者 青木雅志、青木陽子、赤羽包子、足木正幸、足立賢二、荒木 龍、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、市橋葉子、牛越美知子、白井秀明、内澤紀代子、内田和子、遠藤賢二、大岩明子、大城よしの、大角けさ子、大塚剛太、大月みや子、大月八十喜、大中郁子、尾形 寛、岡部登喜子、鬼塚夏海、柿本拓也、開崎八重子、郭 麗玲、河西伊直、鹿取 功、上条尚美、亀井めぐみ、河上純一、川地昌秀、神田栄次、金 京美、木村圭子、倉科祥恵、小林 隆、小林秀子、小松正子、斉藤政雄、坂入慶太、鷺谷美紀、芝村龍太、関 敦志、高荷敏之、高橋慈子、高橋俊之、武井利清、竹内里美、竹平悦子、田中義久、上田孝一、堤加代子、寺島貞友、遠山享史、戸田もえ子、富岡真弓、中島未果、中村敬子、中村次男、中山自子、西村亜弓、布谷勇人、野中めぐみ、萩本信吾、橋田若菜、浜辺麻衣、林 和子、平出貴史、深井美登利、福沢幸一、福嶋紀子、藤井源吾、藤井マツエ、藤原富子、布山 洋、割澤文江、増澤 治、丸茂 新、丸山喜和子、丸山恵子、丸山長彦、三尾みね子、三沢元太郎、道瀬久美子、宮坂ふみ、村田 望、三代澤二三恵、MIN AUNG THWE、村松恵美子、村山牧枝、薮 國成、百瀬二三子、百瀬正彦、両角民子、矢崎寛子、藪下善行、山下俊輔、横山真理、古沢克彦、吉田 勝、依田幸浩、米山禎興、LEE YEE MEE、和田和哉、渡辺よし子

(2) 事務局

松本市教育委員会 岩淵世紀（文化課長）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

(財)松本市教育文化振興財団

事務局 大池 光（事務局長）、牟禮 弘（局次長 ～7年3月）、太田陽啓（局次長 7年4月～）、上条恒剛（次長補佐 ～6年9月）、櫻井荘作（次長補佐 7年4月～）

考古博物館 熊谷康治（館長）、松澤憲一（主査）、古幡昌史（主任）、久保田剛（主事 ～7年3月）、遠藤 守（主事）、秋山桂子（～8年1月）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地形・地質

1 位置と地形

本調査地は松本市大字寿白瀬淵の竹瀝集落（標高 605～610 m）、諏訪神社の北に位置し、市街化による住居に囲まれた水田地域にある。既報の『松本市文化財調査報告 No.39 竹瀝遺跡・南原遺跡』（松本市教育委員会 1986）の調査地点の南方それぞれ 300 m と 560 m にあたり、立地条件（地形・地質・災害）に共通点が多い。

地形上は、田川と牛伏川の合流点に近い、田川の右岸にあり、牛伏川扇状地の末端にのる。本遺跡と北西流（N-30°-W）する牛伏川現河床との距離は東へ 750 m、扇頂の六道との距離は約 3.8 km、扇状地の平均傾斜は N-35°-W、約 2.5° である。竹瀝地籍はこの扇状地の最末端に位置し、天井川となった牛伏川が、扇状地の右扇側の山際を流れるため、上流の白川・白姫、下流の上瀬黒・下瀬黒で破堤した洪水のすべての被害を受けている。また、遺跡と北流する田川との距離は西へ 350 m、天井川になった田川との間に沖積層の凹地形を挟む（平均傾斜約 0.5°）。遺跡はこの扇状地層と沖積層との接触地帯にあり、湧水や粘土質の堆積土がみられる。百瀬遺跡、向原遺跡の段丘崖や崖線の延長もみられ、湧水・堆積層に共通することが多い。

2 湿地性の堆積

遺跡の堆積層は竹瀝遺跡 1 次調査と類似する点が多い。第 1 図にみられるように、1 m を超える土層の堆積には、予想された氾濫性（洪水性）の礫の堆積はない。発掘面に現れた砂礫層は、南西隅の 3 溝、北部中央の 2 溝の 2 条でいずれも溝状のものである。3 溝は西縁が調査区域外にかかる大規模な溝で、砂質土層中にあり、N-10°～20°-W の方向を示す。内部の砂礫は石英閃緑岩とヒン岩の中・細礫の円礫と、石英閃緑岩の風化砂、雲母を含む砂質土からなり、上部 20 cm は鉄分の汚染を受けている。2 溝は深さ 28～40 cm、幅 2.9～12.6 m の、比較的規模の整った溝である。N-40°-W の方向へ流れ、途中 N-20°-W の方向へ分流している。内部の砂礫は 3 溝と同様で、中礫の大きなものは亜角礫である。これらの溝はいずれも現在の地表面から地下 50～60 cm のところにあるが、流れの跡と思われ洪水性の礫の堆積は受けていない。また、2 溝は住居址と 3 溝により切られているので、3 溝より年代が古いと考えられる。

これらの溝を介在させている土層は、第 1 図でみるように厚い灰色～黒灰色の砂質土層である。この土層の上層は深さ 60 cm、耕土（水田）、黄褐色土（溶脱物沈殿層）と薄層の灰色土（粗砂質・溶脱層）、赤褐色土（礫・礫層を挟む。沈殿層）の 2 層からなっている。中層は深さ 60～130 cm、黒褐色～黒色土（粘土質で炭化物を含み、面的な広がりの中では黒灰色～灰褐色を呈す部分も多い）と礫混じりの暗黄褐色～赤褐色土からなっている。下層は深さ 130～170 cm、北西隅では砂質の黄褐色土、中央では黒灰色土とその下の黄褐色土（粗砂・礫混じり）からなり、底部に礫層（厚さ 10 cm、石英閃緑岩、砂岩ホルンフェルスの中・細礫）をもつ。さらに中央の上坑 3 では、最下層として厚さ 40 cm 以上の黒灰色土（黄褐色土を混じえる）が疑く。

以上のように、これらの土層中には、大きな流れや洪水性の堆積物は認められない。上・中・下の 3 層はそれぞれ底部に礫混じりの土や礫層をもち、その上に堆積した細粒砂質土に植物の腐植物が加わった黒色土をもつ土層からなり、少なくとも 3 回の成立年代差が考えられる。土層に含まれる黄褐色～赤褐色の鉄分の沈殿は、1) 流れによる汚染 2) 水田下の沈殿層 3) 湿地底の沈着等の原因が挙げられる。すなわち、最上層は 2)、上層は 1) か 2)、中層・下層は 3) と考えられ、成立環境や年代の差が窺える。

第2節 歴史的環境

竹瀝遺跡のある寿地区北部は、松本市南部の田川と牛伏川の影響によって歴史的な環境が形成されてきた。特に田川は安定した段丘や沖積地を造り、上流の塩尻市域から連続して両岸には縄紋時代から古代・中世に至る集落が営まれていたと考えられている。しかし、中世末以来、牛伏川が大規模な洪水を頻発したため、その影響を直接被った寿地区の被害は甚大で、遺跡も例外ではなく、厚い砂礫に覆われたり、洪水によって破壊されてしまったと推定される場所も多い。したがって、現在確認されている遺跡総数は少なく、範囲も不明瞭となっている。以下では、寿地区とその周辺の歴史的背景について、時代別に概観してみたい。

縄紋時代の遺跡は、田川の崖線下にあたる向原遺跡、その背後の白川遺跡、野田遺跡、中山丘陵北西の平畑遺跡、山行法師遺跡等で、古くから縄紋時代の遺物の出土が知られている。平成4年度の百瀬遺跡の調査では、早期押型紋と後期堀之内式期の土坑が数基確認されたが、集落の広がりなどは明らかにできなかった。寿地区北部一帯の縄紋時代は遺跡数も少なく、不明な点が多い。

弥生時代になると、田川の段丘や沖積地を中心に集落遺跡が発見されている。田川右岸では、中期末の標式遺跡である百瀬遺跡や今回調査の竹瀝遺跡があり、左岸では、さらに下流の出川西・出川南遺跡で6次にわたる発掘調査により後期の集落址の存在が明らかになりつつある。

古墳時代では、田川右岸の百瀬集落内にある耳塚古墳が知られているが、明治のころ破壊され遺物の所在も不明である。東方の中山丘陵の北端山頂には、東日本でも最古の古墳のひとつとみられる前方後方墳の弘法山古墳がある。同古墳を囲む北東から南西の平地部では各所で古墳時代前期の遺構、遺物の発見があり、今後の調査によって集落の存在など古墳造営集団の解明が待たれる。田川左岸では下流の出川南遺跡で平成3年度に古墳時代後期の集落と古墳時代中期の古墳3基が発見、調査された。集落はこの時期のものとしては市内で最大規模のであり、縮小しながら平安時代まで継続している。古墳は平田里1～3号古墳と命名され、1号古墳は墳丘こそ削平され失われていたが、直径24m（周溝内側の径）の大形円墳で周溝からは形象埴輪を伴い多数の円筒埴輪が出土して、県内でも貴重な資料となっている。

奈良・平安時代以降は、前述の出川南遺跡において平安時代の集落址が確認され、また竹瀝遺跡第1次調査で中世以降の住居址が2軒、建物址が2棟調査されている。炭化した柱根が確認されており、焼失等によって廃絶された可能性もある。推測の域を出ないが、この地域は戦国時代には小笠原氏、諏訪氏、武田氏の抗争地帯であり、赤木山周辺では戦いの中で敵地（敵側の民家など）へ放火が行われたという古記録もあることから、この辺りも戦乱による罹災があった可能性も否定できない。白川地籍には内堀・外堀など、竹瀝地籍に馬場山・畑山などの小字の分布があり、地名だけで判断するのは危険だが、中世には上豪の居館が存在したのかもしれない。

江戸時代になると、寿地区は行政上は松本藩領に組み込まれるが、元和4年（1618）以降は諏訪藩領となる。その後、明暦3年（1657）に諏訪藩内でさらに分知があり、その代官所として百瀬知行所が設けられた。いわゆる百瀬陣屋であり、江戸時代中期以降の建築と推定される陣屋を始め、現在は市史跡に指定されている。

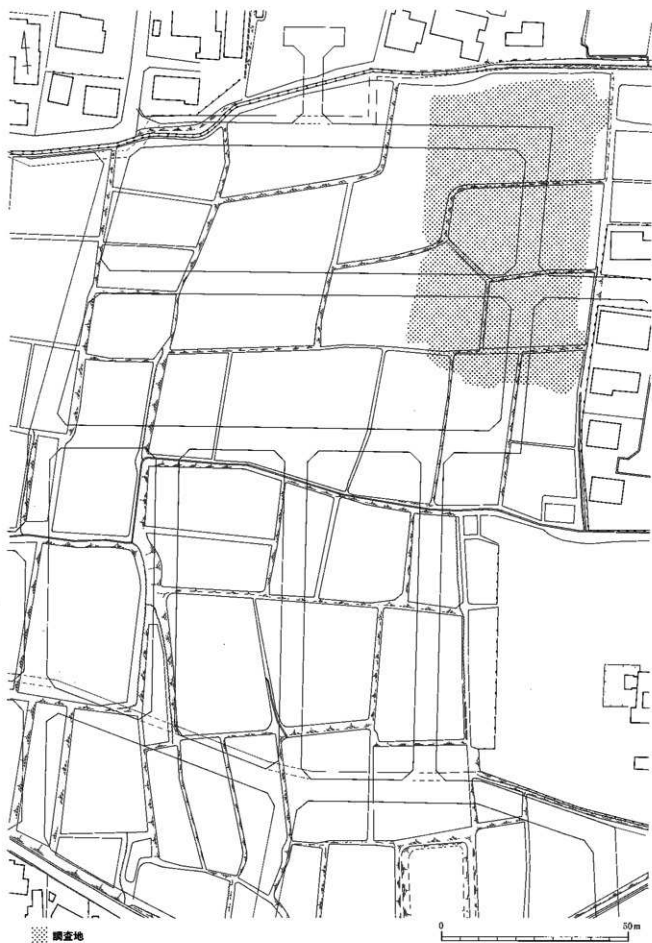
参考文献

- 1 松本市教育委員会 1986 『松本市竹瀝・南原遺跡』
- 2 松本市教育委員会 1993 『松本市百瀬遺跡Ⅱ』
- 3 松本市教育委員会 1994 『出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群』
- 4 松本市 1995 『松本市史 第4巻 旧市町村編Ⅲ』



- 印：前回調査地点・■印：今回調査地点
- | | | | |
|---------|----------|-----------|-----------|
| 1：竹河遺跡 | 6：出川南遺跡 | 11：山行法師遺跡 | 16：百瀬遺跡 |
| 2：南原遺跡 | 7：出川西遺跡 | 12：上瀬無遺跡 | 17：平田本郷遺跡 |
| 3：向原遺跡 | 8：出川遺跡 | 13：台川遺跡 | |
| 4：平田遺跡 | 9：平畑遺跡 | 14：百瀬陣屋跡 | |
| 5：平田北遺跡 | 10：弘法山古墳 | 15：耳塚古墳 | |

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 調査範囲

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査地

今回の調査地は松本市寿北6丁目13・14番一帯にあたる。竹測遺跡は昭和60年に一度調査が行われており、木調査が第2次にあたる。松本市竹測南上地区画整理事業の対象面積は約4haであり、調査地の設定については遺物の表面採集および試掘調査を実施し、遺構・遺物の存在が確認された地点を中心に決定した。調査面積は3,471㎡である。

2 調査方法

調査にあたっては重機を使用して、耕作土と基盤土の一部を除去している。また、調査地の北東に任意の基準点を設け、磁北を基軸として調査地内に3mの方眼を設定し、測量を行った。なお、遺構配置図(第4図)のN・S・E・Wは方位を表し、数字は基準点からの距離を示している。ちなみに、国家座標との関連は、(S24・W24)ポイントが(X=21689.202, Y=-47106.836)に相当する。遺構番号は、第1次調査の番号を継続して使用している。

3 遺構

住居址12軒(竪穴10、周溝のみ残存2)、掘立柱建物址7棟、溝3条、土坑20基、ピット83個

住居址と建物址を含む上記の遺構のほとんどが弥生時代後期初頭～前半に属すると考えられるが、若干の土坑とピットが中世に下り、溝2条は弥生時代中期に遡る流路の可能性がある。遺構の分布状況は調査区内全面に点在するが、事前の試掘調査の結果からは3溝付近が弥生時代遺構分布の西端と想定される。南・北・東側では調査区域外まで遺構分布が続いており分布の限界を確認することはできなかった。住居址の平面形は基本的に楕円で、隅丸方形を呈するものも8住を除き楕円に近い。住居址の炉は土器炉が主体である。掘立柱建物址は7棟検出されたが、すべて住居址と同期の弥生時代のもと考えられ、松本平において弥生時代の掘立柱建物址が発見された初例となった。棟数の点でも住居址に比肩することは注目されよう。これらの柱配置は方形や長方形を呈し、2～4間×1間を基本としている。

4 遺物

弥生土器、弥生時代石器・石製品(打製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、石包丁、スクレイパー、敲・砥石、台石、管玉、研磨礫、紡錘車)・土製品、中世上器・陶磁器

これらの大半は、住居址から出土した。特に、磨製石鏃とその未製品や剥片などが多量に出土した住居址がみられ、遺跡における磨製石器の製作について良好な検討材料を提供した。

第1表 土層略号一覧

土 層 色 別	1 褐色	2 暗褐色	3 黒褐色	4 明褐色	5 赤褐色	6 黄褐色
	7 茶褐色	8 灰褐色	9 橙褐色	10 灰色	11 暗灰色	12 黒灰色
	13 赤灰色	14 黄灰色	15 青灰色	16 黄色	17 暗黄褐色	18 暗茶褐色
掘 込 物	19 黒色	20 焼土	21 砂	22 砂礫		
	A 小礫	B 礫	C 焼土粒	D 焼土塊	E 炭化物粒	F 炭化物塊
	G 炭化材	H 黄色土粒	I 黄褐色土粒	J 橙褐色土粒	K 茶褐色土粒	L 黄色土塊
量	M 黄褐色土塊	N 橙褐色土塊	O 茶褐色土塊	P 砂粒	Q 黒色土粒	R 黒色土塊
	a 少量	b 中量	c 多量			

第2節 遺 構

1 住居址

第3号住居址 (第6図)

調査区南東部に位置し、西側の一部が確認されたのみで大半は調査区域外に延びている。他遺構との切り合いは、1溝に切られる。規模は、確認された範囲で南北4.6m、東西1.2m、床面積4.23㎡を測る。壁は、遺存状況が悪く高さ11cmを確認したのみである。床面は、明灰色砂質土の地山を床としており軟弱である。覆土は灰褐色土の単層である。炉、ピットなど本址に伴う施設は発見されなかった。遺物は土器と石器が出土している。土器は小片で図化できるものではなく拓影で2点を提示できた。石器は磨製石織末成品4点、砥石1点が覆土より出土した。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期初頭～前半と考える。

第4号住居址 (第6図)

調査区中央やや南東寄りに位置する。他遺構との切り合いはない。規模・平面形は長軸4.84m、短軸4.4mの方形を呈する。床面積は18.27㎡を測り、主軸はN-80°-Wを指す。壁は遺存状態が悪く、なだらかに立ち上がる。床面は、明灰色砂質土の軟弱な地山面を床と捉えた。ピットは11個確認されたが、このうちP₁～P₄が主柱穴と考えられる。炉は中央やや東よりに位置する。壘(4:図化提示した土器番号。以下、同じ)を正位に埋設した土器炉で、頸部以上と底部を欠くが、底の穴をふさぐように別個体の土器底部(5)を上逆にしてはめ込んでいた。また、炉内の壁上上層には別個体の壘(3)の破片が敷き詰められていた。遺物は、主に南東部の覆土中から出土した。土器は炉体を含め7点を図化、8点を拓影で示す。石器は敲・砥石が2点出土している。他に、図化不能だが覆土中位から上位にかけて磨製石織製作時のものと考えられる粘板岩・千枚岩系の粗割片、チップが15点ほど出土していることが注目される。本址の時期は、遺物からみて弥生時代後期初頭～前半と考える。

第5号住居址 (第6図)

調査区中央やや北東よりに位置する。他遺構との切り合いは、2溝を切っている。規模・平面形は長軸6.48m、短軸4.88mの楕円形を呈する。床面積は25.07㎡であり、主軸はN-90°-Wを指す。壁は高さ10cmほどで垂直に立ち上がる。床は、2溝を切る部分では灰色の砂であり、他の部分は灰褐色の砂質土で、全体的に軟弱である。ピットは6個確認され、主柱穴はP₁～P₄と考えられ、P₂、P₃からは柱痕がみられた。また、北東部を除いて幅20～40cm、深さ8cmの周溝が廻っている。炉は、中央やや東寄りであり、被熱面はわずかである。灰の堆積の上に土器片、炭化物がみられるが、地床炉の可能性が高い。遺物は少ないが、土器1点を図化、2点を拓影でしめす。石器は磨製石織3点(うち1点は小片のため実測不能)、同末成品2点及び同石器製作時のものと考えられるチップが3点ほどみられた。本址の時期は遺物から判断して弥生時代後期初頭～前半と考える。

第6号住居址 (第7図)

調査区南西寄りに位置する。他遺構との切り合いはない。規模・平面形は長軸7.92m、短軸5.84mの楕円形を呈する。床面積は32.02㎡である。主軸はN-90°-Wをしめす。壁は、高さ43cmでなだらかに立ち上がる。床は、灰褐色土でやや軟弱である。ピットは26個みられ、このうちP₁～P₄またはP_mが主柱穴、P₅、P₆が脇柱と考えられ、これらには柱痕がみられた。その他の10個のピットからも柱痕がみられ、東側への建て替え拡張(または縮小)等がされた可能性もある。炉は中央やや西寄りに位置する。胴部下半を欠く壘(10)を逆位に埋設した土器炉で、炉体土器は東側のみが残存し、またその内側にも土器片を配し、二重に廻らした形となっている。本址は、検出の際に覆土が二重のリング状を呈して確認され、当初は内側のラインを

住居址プランと考えた。しかし、上層観察の結果、住居廃絶後にまず壁際部分が自然或いは人為的に埋没し、その後中央部分が埋没した様子が窺え、本址のプランは外側のラインであることが確認された。遺物は土器と石器がある。土器は炉体を含め3点を図化、1点を拓影で示す。石器は西側の覆土を中心に、磨製石鏃5点、同未成品4点（うち1点は小片のため実測不能）、敲・砥石6点、台石1点が出土している。また、磨製石鏃作製時のものとみられる粗割小剥片も2点ある。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期初頭～前半と考える。

第7号住居址（第8図）

調査区中央やや北西寄りに位置する。他遺構との切り合いはない。規模・平面形は長軸7.32m、短軸5.6mの楕円形を呈する。床面積は32.05㎡であり、主軸はN-95°-Wをしめす。壁は高さ29cmでなだらかに立ち上がる。床面はあまり明瞭ではなく、黒色粘質土で全体的に軟弱である。ピットは7個確認され、このうちP₁～P₆が主柱穴で柱痕がみられ6本柱の長方形配列になると考えられるが、南東隅の1個が検出できなかった。炉は中央やや西寄り、緑行を有する土器炉である。頸部と胴部下半を欠く甕(14)を正位に埋設し、そのすぐ外側の北、東、南に河原石を配しているが、西側には石がなく別個体の土器片(15)を敷いた形となっている。遺物は土器、石器、石製品が出土している。土器は炉体を含めて7点を図化、1点を拓影で提示した。石器は磨製石鏃2点、同未成品7点及び打製石斧1点で、他に磨製石鏃作製時のものとみられる粗割小剥片、チップが3点出土している。石製品は管玉1点がある。出土状態は北西部の覆土を中心に、土器片、石器等比較的まとまった状態で存在していた。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期初頭～後半と考える。

第8号住居址（第8図）

調査区南端に位置する。他遺構との切り合いはない。規模・平面形は長軸7.56m、短軸6.56mの隅丸長方形を呈する。床面積は34.39㎡であり、主軸はN-80°-Wをしめす。壁は、高さ33cmでなだらかに立ち上がる。床面は軟弱で確認が困難であったが、黄灰褐色小礫混りの地山面を床と捉えた。ピットは9個確認され、このうちP₁～P₄が配置からみて主柱穴と考えられるが、いずれも柱痕は径が小さく、また掘り込みも浅く貧弱である。炉は東側の主柱穴(P₁、P₂)間のやや中央寄りにあり、底部を欠く甕の胴部下半を正位に埋設した土器炉であるが西側を欠失し、遺存状態は悪い。遺物は土器・石器が東側半分の覆土を中心として多く出土した。土器は5点を図化、6点を拓影で示す。石器は打製石鏃1点、磨製石鏃7点（うち1点は小片のため実測不能）、同未成品10点、スクレイパー1点、打製石斧1点、石包丁3点、敲・砥石4点と多種多量である。また、磨製石鏃作製時のものとみられる粗割小剥片・チップが31点出土している。石製品・土製品は研磨礫と土製の円板が各1点ある。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期初頭～前半と考える。

第9号住居址（第9図）

調査区南東寄りに位置する。他遺構との切り合いはない。規模・平面形は長軸6.68m、短軸5.52mの長辺が丸く張り出す隅丸長方形を呈する。床面積は30.38㎡であり、主軸はN-90°-Wをしめす。壁は、高さ49cmでややなだらかに立ち上がる。床面は灰褐色土で全体的にやや軟弱である。ピットは7個確認され、このうちP₁～P₆が主柱穴で6本柱の長方形配列になると考えられ、すべてのピットから柱痕が確認された。炉は西側壁側の主柱穴(P₁、P₄)間やや中央寄りに位置する土器炉である。炉体土器は、胴部上半と底部を打ち欠き逆位に埋設された甕(32)で、西側部分が欠失している。炉の掘り方も土器の欠失している西側はなだらかに掘り込まれている。遺物は土器と石器、土製品があり、東側を中心とする覆土から多量に出土した。土器は炉体を含めて13点を図化できた。石器は磨製石鏃4点、同未成品19点（うち1点は小片のため実測不能）、ピエス・エスキュー1点、敲・砥石10点が出土しており、他に磨製石鏃作製時のものとみられる

粘板岩系石材の粗割剥片・チップも38点ある。土製品は土器形ミニチュア1点である。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期初頭～前半と考える。

第10号住居址（第9図）

調査区の北西部に位置する。他遺構との切り合いはない。他の竪穴住居址と異なり、環状の溝が西側を除いて廻る遺構である。規模・平面形は4.56m×4.52mの円形を呈する。溝の内側の面積は11.62㎡である。壁は全く残存せず、また床面も明瞭ではない。ピットは、溝のとぎれた部分から1個確認されたが、柱痕はみられず、本址の柱穴となるのかは不明である。炉らしきものも見当たらない。本址を住居址と捉えることは大いに疑問であるが、今回は環状の溝を住居周溝と推定し、後述する同様の遺構である14住とともに住居址として扱った。遺物は溝内から土器片が若干出土したのみで、2点を拓影で示した。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期初頭～前半と考える。

第11号住居址（第10図）

調査区北東部に位置し、東半分は区域外であったため、人力で拡張して調査を行った。他遺構との切り合いはない。規模・平面形は長軸8.84m、短軸6.76mの楕円形を呈する。床面積は46.38㎡であり、主軸はN-50°-Eをします。他の住居と比べて、主軸が大きすぎている。壁の高さは約20cmを測り、垂直に立ち上がる。床面は砂質で、全体的に軟弱である。ピットは9個確認されたが位置からみてP₁～P₄が主柱穴、P₅～P₉が脇柱または出入り口の施設に関するものと考えられ、このうちP₁～P₆、P₉からは柱痕が確認された。主柱穴の掘り方は平面形が扁平な楕円を呈するのが特徴である。ただし、P₄は排水のために掘ったトレンチにより、一部破壊されている。炉は東寄りの主柱穴P₃・P₄間に位置し、新旧2つが接した土器で、周囲には床面より浮いた状態で炭化物が広がっていた。炉2（旧炉）が西側に位置し、連2個体分の土器（45・46）を二重に組合せ敷いている。炉1（新炉）は、炉2の東部分を一部欠いて設けられ、壺の胴部（36）の割れたものを中心に壺（41）の数破片を下に敷くが、西側部分を欠失している。遺物は土器、石器、石製品があり、石器類が南側覆土中に集中していた。土器は炉内土器4点を含め15点を図化、7点を拓影で示した。石器は打製石鏃1点、磨製石鏃2点、肉未成品6点（うち2点は小片のため実測不能）、石匙？1点、使用痕のある剥片2点、打製石斧1点、石包丁1点、敲・砥石12点と多岐にわたる。他に磨製石鏃作製時のものとみられる粘板岩系石材のチップが11点出土している。石製品は研磨雑らしいものが1点ある。本址の時期は遺物等からみて、弥生時代後期初頭～前半のものと考えられる。

第12号住居址（第7図）

調査区北部やや西寄りに位置し、他遺構との切り合いは4溝を切り2溝を貼っている。規模・平面形は長軸7.32m、短軸5.60mの隅丸長方形に近い楕円形を呈する。床面積は32.05㎡であり、主軸はN-95°-Wを示す。壁の高さは29cmを測り、ややなだらかに立ち上がる。床面は灰褐色で、礫が多く露出している。ピットは10個確認されたが、このうちP₁～P₃、P₅が主柱穴と考えられ、柱痕が確認された。また、北東部壁際のみ長さ1.80mの周溝が残存し、幅15cm前後、深さ8cm前後を測る。炉は中央やや西寄りに位置する壺を逆に埋設した土器炉で、炉体土器は東側のみが残存している。南側の覆土下層から石製紡錘車が出土している。遺物はきわめて少なく、炉体土器と紡錘車の2点を図化提示できたのみである。他の住居址で出土している剥片、チップもほとんどみられない。本址の時期は遺物からみて弥生時代後期初頭～前半と考えられる。

第13号住居址（第11図）

調査区のほぼ中央に位置する。規模・平面形は長軸7.32m、短軸6.12mの隅丸長方形を呈する。他遺構との切り合いはない。床面積は34.65㎡であり、主軸はN-80°-Wをします。壁は高さ36cmを測り、なだらかに立ち上がる。床面は黄色土粒混入の灰褐色土の地山面を床と捉えた。また、北壁際1m付近では小礫が露出していた。ピットは12個確認され、このうちP₁、P₃～P₇が6本長方形配列の主柱穴と考えられ、柱痕

も確認された。炉は中央やや西寄りに位置する土器炉である。炉体土器は、壺の胴部下半(55)破片を敷いた上に壺の胴部(58)を置き巡らしているが、北側のみが残存した。遺物は土器と石器類が全体的に覆土中から多く出土している。土器は炉体を含めて8点を図化提示できた。石器は磨製石鏃3点、同未成品5点、蔽・砥石2点があり、磨製石鏃作製時のものとみられる粘板岩系石材の粗割剥片・チップも3点出土している。本址の時期は遺物からみて弥生時代後期初頭～前半と考えられる。

第14号住居址(第10図)

調査区北西部、10住の南に位置するが、近代の暗渠に切られている。環状の溝のみが残る遺構である。規模・平面形は6.16m×5.20mのほぼ楕円形を呈する。溝に囲まれる範囲の面積は15.66㎡である。壁はまったく存在せず、ピットや炉もみられない。10住でも述べたとおり、本址も環状の溝を住居周溝と判断し、住居址と考えた。遺物は溝の東側部分から土器小片が1点出土しているのみで、図化提示できるものはなかった。時期は遺物からみて弥生時代後期初頭～前半のものと考えられる。

2 掘立柱建物址(第11図～第12図)

今回の調査では、基本的にピットが方形・長方形に並ぶものを掘立柱建物址として扱い、7棟の存在を認めた。ほとんどのピットで柱痕を残している。時期は、少量ではあるが弥生時代の土器片が出土したことや、竪穴住居址と重複せず等質に調査地内に展開することから、いずれも竪穴住居址と併行する弥生時代後期初頭～前半に属すると推定した。

第3号掘立柱建物址(第11図)

調査区北東部に位置する。灰褐色土の地山を掘り込む。切り合い関係は無く、東西1間(3.36～3.48m)×南北3間(4.80～4.88m)の長方形の建物址で、長軸方向はN-20°-Wを示す。柱間寸法は長辺1.48～1.64m、短辺3.36～3.48mを測る。柱穴は8個(P₁～P₈)が確認された。掘り方の平面形はほとんどが円形で、規模は直径22～31cm前後を測る。断面形はすべて方形を呈しており、深さは15～26cmで、ややばらつきがみられる。柱痕は、全ての柱穴から確認され、柱痕部分の土はいずれも炭化物粒を微量に含む粘質の黒灰色土、掘り方の上はいずれも粘質の灰褐色土であった。遺物は、土器片が若干出土した。

第4号掘立柱建物址(第12図)

調査区北東部、7建の東隣に位置する。灰褐色土の地山を掘り込む。東西2間(2.60～2.88m)×南北1間(2.80～3.04m)のほぼ方形を呈す建物址で、主軸方向はN-75°-Eを示す。柱間寸法は2間の辺側が1.24～1.40m、1間の辺が2.80～3.04mを測る。柱穴は7個確認された。掘り方の平面形はほとんどが円形で、規模は直径30cm前後である。断面形は方形或いは柱痕部分が下に突出した方形であり、深さは10～31cmとばらつきがみられる。柱痕はすべての柱穴から確認され、いずれも柱痕部分は黒灰色土、掘り方の埋土は砂粒を含む灰褐色土であった。P₅とP₆は、土層の観察では切り合い関係が認められず、同時期に掘り込まれたものと推測する。当初、本址は7建を含む東西に細長い建物址と捉えたが、覆土が異なることなどから、別の建物址に変更した。遺物はほとんど出土しなかった。

第5号掘立柱建物址(第12図)

調査区北西部、10住・14住の東に位置する。砂礫質灰褐色土を地山を掘り込む。切り合い関係は無く、東西4間(5.6～5.64m)×南北1間(2.80～3.00m)の長方形の建物址で、長軸方向はN-87°-Wを示す。柱間寸法は長辺1.4～1.56m、短辺2.80～3.00mを測る。柱穴は10個が確認された。掘り方の平面形はほとんどが円形で、規模は直径24cm前後である。断面形はほとんどが逆台形を呈しており、深さはすべて20cm前後である。柱痕はすべての柱穴から確認され、いずれも柱痕部分は砂粒を含む黒灰色土、掘り方の埋土は砂粒を含む灰褐色土であった。遺物はほとんど出土しなかった。

第6号掘立柱建物址 (第11図)

調査区南部に位置する。灰褐色土の地山を掘り込む。切り合い関係は無く、東西3間(3.6～3.68m)×南北1間(2.60m)の長方形の建物址で、長軸方向はN-75°-Eを示す。柱間寸法は長辺1.12～1.48m、短辺2.60mを測る。柱穴は8個確認された。掘り方の平面形は円形ないしは楕円形で、規模は直径20cm前後である。断面形はすべて逆台形を呈しており、深さはすべて15cm前後である。柱痕は、全てのピットから確認され、いずれも柱痕部分は茶褐色土粒を含む黒灰色土、掘り方は茶褐色土粒・砂粒を含む灰褐色土であった。遺物はほとんど出土しなかった。

第7号掘立柱建物址 (第12図)

調査区北東部、4建の西側に位置する。灰褐色土の地山を掘り込む。切り合い関係はなく、東西2間(2.76～2.92m)×南北1間(3.00m)のほぼ方形を呈す建物址で、主軸方向はN-75°-Eを示す。柱間寸法は2間の辺が1.16～1.56m、1間の辺が3.00mを測る。本址を構成する柱穴は6個が確認された。掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈し、径は20～40cm、深さは17～34cmとばらつきがみられる。断面形は方形あるいは柱痕部分が下に突出した方形である。柱痕はすべてのピットから確認され、柱痕部分の土はいずれも黒灰色で、掘り方の土は砂粒を含む灰褐色土であった。本址の調査では4建で述べたと同様の経緯があり、単独の建物址と判断した。遺物はほとんど出土していない。

第8号掘立柱建物址 (第12図)

調査区の中央部、13住の南に位置する。灰褐色土の地山を掘り込んでいる。切り合い関係はなく、東西3間(5.16～5.24m)×南北1間または2間(4.16m)の長方形の建物址で、長軸方向はN-85°-Wをしめす。柱間寸法は長辺1.60～1.72m、短辺1.68～1.88mを測る。本址を構成するピットは10個確認され、掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈する。規模は直径20cm前後であり、深さは8～17cmである。断面形は方形が多いが、逆台形、半円形を呈するものもある。柱痕については確認することができなかったが、灰褐色土を覆土とするものが多く、小礫、焼土粒及び茶褐色土粒の混入がみられた。また、黄褐色土及び暗褐色土を覆土とするものもみられ、各ピットでばらつきがある。遺物はほとんど出土しなかった。

第9号掘立柱建物址 (第12図)

調査区の南東部、4住の南に位置する。灰褐色土の地山を掘り込んでいる。切り合い関係はなく、東西2間(3.44～3.60m)×南北1間(2.32m)の長方形の建物址で、長軸方向はN-85°-Eをしめす。柱間寸法は長辺1.68～1.84m、奥行1.68～2.32mを測る。柱穴6個で構成され、掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈する。規模はP₁～P₃が直径15cm前後、P₆が直径26cmで、深さは7～16cmを測る。断面形はP₁が半円形で、他は方形である。柱痕はほとんどのものから確認され、柱痕部分の土層はいずれも黒灰色土であり、掘り方の上は灰褐色土の一部に黄褐色土もみられた。本址は当初、周囲の他のピットと併せピット群として捉えられていたが、配列及び覆土の状況から建物址と判断し、ピット群から分離した。遺物はほとんど出土しなかった。

3 土坑 (第13図)

今回の調査では20基の土坑が確認された。時期の推定できる土坑は少ない。調査区内の分布としては、北東部の11住西側及び西部の3溝付近の2か所が集中域として確認され、その他は単独で存在する。全体的にみると、平面形はほとんどが円形ないしは楕円形で、不整形のものもいくつかあるが、いずれも規模は一定していない。また、掘り込みは浅いものが多い。遺物については、あまり川上はみられなかった。全容は一覧表に譲り、ここでは特徴的なものに限って触れてみたい。

第3号土坑

調査区西部、3溝付近の土坑集中域に位置する。他遺構との切り合いはない。地山の灰色砂層を掘り込む。平面形は楕円形で、規模は南北205cm、東西180cmである。検出面からの掘り込みは156cmと深く、壁の傾きはほぼ垂直で、底部付近からなだらかになり、中央に向かって徐々に窪む断面形を呈する。底面は地山の灰色の砂層で軟弱である。遺物は覆土中・下層より木片が出土しているが本遺構の施設部材として用いられていたものか廃棄されたものかは不明である。本址の所属時期は覆土の土層からみて中世に下る可能性がある。

第5号土坑

調査区西部、3溝付近の土坑集中域に位置する。他遺構との切り合い関係はない。地山の灰色砂層を掘り込む。平面形は円形で、規模は直径85cmである。検出面からの掘り込みは12cmと浅く、壁はなだらかである。底面は地山の灰色の砂層で軟弱であり、ほぼ平坦である。遺物は、土器片が数点出土したのみである。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代後期と考えられる。

第12号土坑・第13号土坑

調査区北東部、11住西側の土坑集中域に位置する。12土が13土を切る形で検出された。地山の灰褐色土層を掘り込む。平面形は両者とも不整形長円形である。規模は12土が長径194cm、短径84cm、13土が長径150cm、短径65cmを測る。検出面からの掘り込みは12土が8cm、13土が12cmといずれもあまり深くない。壁は両者とも傾きをもって掘り込まれ、底面は地山の灰褐色土層で、ほぼ平坦である。遺物は、両方とも出土をみなかった。本址の所属時期は決定するに至らなかった。

第22号土坑

調査区中央やや北に単独で存在する。他遺構との切り合い関係はない。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。平面形は不整形長方形が複合したような形で、長さ115cm、幅87cmを測る。検出面からの掘り込みは14cmとあまり深くない。壁はなだらかで、特に北壁はほとんど立ち上がりが認められない。覆土は茶褐色土で、炭化物、焼土が多量に混入していた。底面は黄褐色砂質土の地山で、あまり被熱はしていない。遺物として細かい骨片がみられた。覆土混入物と骨片の存在から、本址は火葬墓、または火葬施設的な性格を有すると考えられる。時期については、遺構の性格から中世に属するものと推定する。

第23号土坑

調査区南西部、3溝沿いの土坑集中域から少し東にはずれて位置する。他遺構との切り合い関係はない。灰褐色土の地山を掘り込む。平面形は楕円形で、長径195cm、短径145cmを測り、検出面からの深さは40cmを測る。壁は垂直に近い角度で掘り込まれ、底面は灰褐色土の地山で平坦である。遺物は、陶器片が若干みられた。本址の時期は、遺物から判断して中世に属するものと考えられる。

4 溝址

第1号溝址

調査区南東部に位置し3住を切っている。北東（高）－南西（低）の方向を示し、長さ4.8m、幅24～28cm、深さ4～12cmを測るが、本来は両端ともさらに延びていたと考えられる。断面形は逆台形で部分的に深くなっている。覆土は暗褐色土の単層で、遺物は石鏃が1点確認できたのみである。3住との関連及び本址の時期については明確にできなかった。

第2号溝址（第13図）

調査区の北部に位置し、5住・12住及び3溝に切られる。南東（高）から北西（低）の方向に向かう、大形で不整形な溝である。長さ45m、最小幅で2.9m、最大幅は溝中央の中洲を含む部分で12.6mを測る。深さはトレンチによる確認で28～40cmになる。断面形は縁部は緩やかな傾斜で、底部はほぼ平坦である。覆土は

最底面に黒色土がみられ、これより上層は砂粒を混入する灰褐色土と砂礫層が交互に堆積しており、水流の痕跡が窺える。また、中洲状部分の北側は砂礫層の堆積が浅い。

遺物は覆上中から弥生土器片が数点と砥石が出土したが、土器片は摩滅しているものもある。土器は3点を図化(59～61)、1点を拓影(96)で、また石器は1点を図示(145)した。時間的には住居址出土品より古いものが含まれており、他の地点からの流れ込みが考えられる。本址は人為的な掘り込みではなく、自然の流路と推定される。

第3号溝址(第13図)

調査区南東隅及び調査区北東隅で確認できた規模の大きな溝で、ほぼ南(高)から北(低)へ流下していると推定される。調査区南東隅では東側のラインは確認できたが、西側が区域外となるため、溝幅の把握はできない。また、調査区北東隅では2溝を切る形で再び区域内に現れる。平面的にみると、東側は黒色土が20cm幅で確認でき、西側は砂礫が広がる。本址の掘下げは幅1m、長さ8.8mのトレンチ調査により行った。結果は、溝底面は東端部でのみ確認できたが、緩やかな傾斜を有しており、それよりも中央寄りでは下層の黒色土の堆積が厚く、底面の確認は不可能であった。覆上は、1mの深さまでは砂層及び砂礫層がみられ、水流の痕跡が残っている。その下層では40cmの間に砂層・砂礫層と灰色土が交互に堆積し、最下層は黒色土の堆積となっている。

遺物は弥生土器の帯や縄紋土器とみられる土器片数点と打製石斧・敲・砥石が覆上の黒色土中から出土し、2溝と同様に住居址より古い弥生時代中期前半以前の遺物も含まれている。土器は図示と拓影で各1点(62・97)、石器は打製石斧1点と敲・砥石2点を図化(98・146・147)した。本址の性格は、かなり幅が広く端部底面の傾斜が緩やかな点から集落の環壕など人為的な遺構とは考えられない。むしろ、住居址よりも古い時期の遺物を出土したことから、今回調査の集落が形成された頃には既に存在していた自然流路の可能性が高い。さらに、本調査地点の周辺には弥生時代中期にさかのぼる遺跡・遺構の存在を想起させるものといえる。

5 ビット

中世の検出面に相当するとみられる層位と、弥生時代の検出面でそれぞれ確認された。

中世に相当するとみられる層位は、断面観察の結果では弥生時代の検出面より50cmほど上層になると推定されているが、重機による表土除去で少し削り込み過ぎ、弥生時代の住居址等が検出された面より20～30cmほどの高さで点々と存在するビットを確認した。これらのビットはほとんどが柱痕を有している。内部や周辺からは内耳土器片、陶器片がわずかではあるが出土したため、中世に属する遺構であることは確実と考えられる。しかし、配列が明確に捉えられず、掘立柱建物址かどうかを明らかにすることは出来なかった。

弥生時代に属すると考えられるもの(第4図)は、弥生時代の竪穴住居址及び掘立柱建物址と同一の面で約40個ほど検出された。分布は集中する傾向があり、3建の南と西、9建の南と西にそれぞれ集まっている。一部のものには柱痕も認められた。建物や柵などの施設の柱掘り方の可能性も残るが、調査段階では積極的に認定できなかった。

第3節 遺物

1 土器・陶器

(1) 縄紋土器 (第19図)

包含層から縄紋土器とみられる破片がごくわずかに出土している。97の拓影1点を提示できたのみである。縄紋の地紋に沈線で紋様を描いており、後晩期に属するのではないかと考えている。

(2) 弥生土器 (第14図～第19図)

① 概要

今回の調査では、塚穴住居址・溝などの遺構内及び検出面から多数の弥生土器が出土し、すべての出土遺物の中で圧倒的な中核をなす。その数量は整理用コンテナ14箱になる。このうち66個体を復元・図化し、34点を拓影で提示できた。

器種としては壺・甕・高環・鉢がみられる。時期的には、溝と検出面から出土した数点が弥生時代中期前半～中頃に遡る他は、ほとんどが後期初頭から前半に位置付けられるものと考えられる。

② 器種・器形

ア 壺

壺A (22・24・25・81) 口縁端部が屈曲して上方に立ち上がる壺。全形を知りうるものはないが、胴部上半の器壁の傾きからみると、器高に対して比較的張りの強い胴部を持つものと推定される。紋様構成は、24・25をみると、口縁端の立ち上がり部と頸部及び胴部上半に横の紋様帯を有し、しかもこれらの紋様帯は上下に無紋部をつくって、接したり重なったりしないのが特徴である。頸部及び胴部上半の紋様帯には櫛描波状紋が多用されるが、まれに櫛描短線紋もみられる。

壺B (9・12・13・35・51) 口縁端部が単純に外開または外反する壺。全形がわかるものは1点しかないが、壺Aに比べると胴部の張りは穏やかで、紋様構成は櫛描横線紋や櫛描簾状紋が頸部に積み重なり、他の部分は無紋となっている。形態や紋様から類推すると、頸部にT字紋を持つ23・36・37・84や鋸歯紋を持つ65なども壺Bに含まれる可能性がある。

その他の壺 (49・62) 62はやや短頸の細頸壺になると推定される。今回の資料の中で他にまったく類例を見ない。49も胴部下半の底部付近まで紋様を有し、他とは際立って異なるものである。

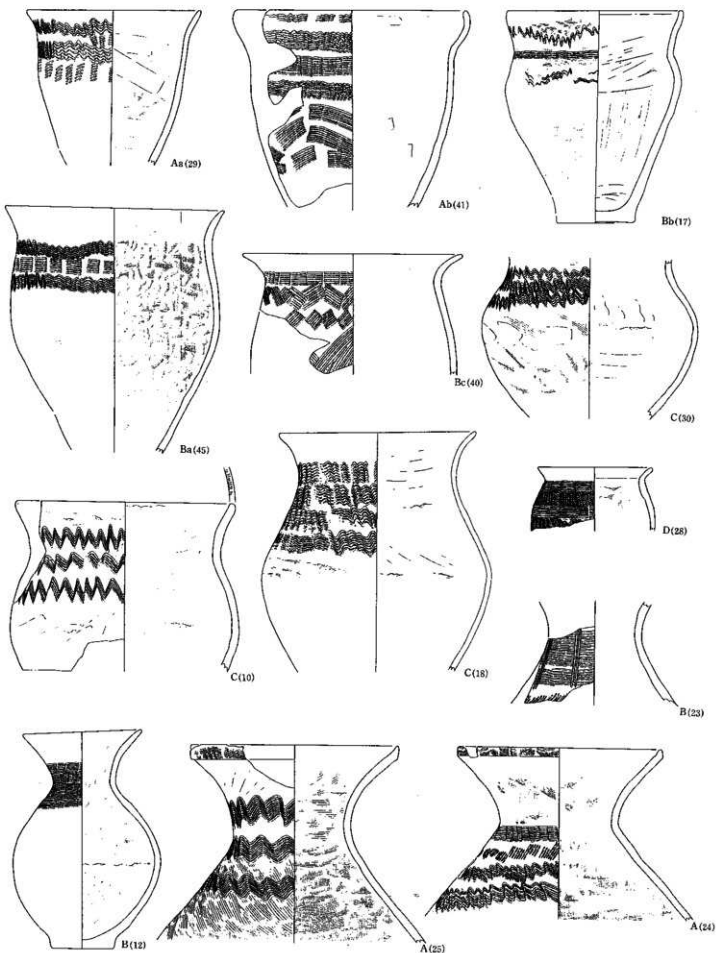
イ 甕

甕A 最大径が口縁端部付近にあり、下方へ向かって徐々に径を減じていく深鉢形を呈する甕。口縁部が単純に外開する甕Aa (29)と、受け口状になる甕Ab (41)がある。紋様構成は頸部に簾状紋か波状紋を有し、口縁部は波状紋、胴部は波状紋や縦横の羽状条線紋・短線紋が施される。

甕B 頸部に若干のくびれを有し、最大径が口縁部または胴部上半付近にある甕。口縁部が単純に外開する甕Ba (27・40・45・48・56・57・63)と、受け口状を呈する甕Bb (2・17・33・42・46)、強く外反する甕Bcがある。紋様構成は、頸部簾状紋が横走短線紋に置き替わっている例 (45)などの特殊なものもみられるが、全体的に甕Aとあまり変わらない。

甕C (4・10・14・15・18・19・30・32・44・47・58) 口縁部が長くのびて、頸部がくびれるとともに胴部が大きく張り、最大径が胴部中位付近にある甕。紋様構成は波状紋あるいは短線紋のみという単純なものも多く、2種類以上の紋様が用いられているのは11例の中で3個体しかない。

その他の甕 口縁部が短く「く」の字に屈曲する甕。28の1点のみが該当する。波状紋を含んではいないが、簾状紋や櫛描横線紋が重積する横帯の紋様構成は、北陸地方の土器の影響があると推測している。



第 5 圖 弥生土器器形一覽

ウ 高坏

4点を図化提示しているが全形のわかるものはない。いずれも小振り、39を除き坏部内外面と脚部外面に赤彩がある。39は在地の高坏の系譜の中では捉えられない形態で、外来的な要素を含むか、高坏とは異なる種類の可能性もあろう。

エ ミニチュア

66の1点のみが出土している。手握ねで、鉢か深鉢形の壺を模したものと推定される。

③ 紋様、紋様帯

ア 棒状施紋具による紋様

この紋様の原体は、一般に篋状または棒状の施紋具と表記されることが多いが、実際は直径2～5mmの竹管または半截・多截竹管を用いていると想定される。今回の出土土器にはほとんど用いられていない紋様である。

刺突・刻み 棒状施紋具による刺突は見出せなかった。刻みは42を代表とするごくわずかな数の壺と高坏(鉢? : 39)の口唇部に認められたのみである。なお、10・31・63・71の壺の口唇部にみられる刻みは棒状施紋具によるものではなく、次項で述べる櫛歯状施紋具によってつけられたものと考えられる。

横線 棒状施紋具による横線は今回の土器群の中には見出せなかった。

その他の沈線 49・62の「その他の壺」としたものに描かれた同心円や重三角状の沈線、菱形の沈線区画が棒状施紋具で描かれた沈線である。いずれの壺も今回の調査で主体となって出土した土器より古い、弥生時代中期前半～中頃に属する。

イ 櫛歯状施紋具による紋様

原体は直径1mmほどの門柱形の棒を数本、ほぼ1列になるように束ねて持ったものと推定される。単体で沈線を描くこともある。紋様を櫛描紋、原体を櫛描原体と総称する。

刺突・刻み 刺突がみられる個体はない。刻みは一部の壺の口唇にみられる(10・31・63・71)。櫛歯状施紋具による口唇部の刻みは、棒状施紋具より細く、数本が一単位になっていることで判別できる。

沈線紋 原体の単体を1本の細い棒として用いて紋様を描いたもの。65の壺の鋸歯紋や斜行充填沈線が該当するが、この例はかなり細く鋭い線なので、さらに先が尖った施紋具を使用している可能性もある。

短線紋 原体を器面で1～2cm移動させるだけで施紋した短い櫛描紋。横方向に連続させて紋様帯を形成している。単に横に施紋した横走短線紋(19・45)、同方向に傾けた斜行短線紋(24・29・42・53)、向きの異なる斜行短線を横方向に交互に連続させた山形短線紋(2・96)、逆方向の斜行短線を2段に重ねた横羽状短線紋(47・50)などの多様性がみられる。まれに19のように横走短線紋のみで紋様を構成している個体もある。

横線紋 単に横方向に連続する櫛描紋。壺42や62の頸部にみられ、基本的に縻状紋の代替ないしは省略と理解することができる。壺28の胴部にも認められるが、これは縻状紋を意識したものではないであろう。

T字紋 横線紋を3段以上重ね、それを櫛描原体で縦に切る櫛描紋。原体の単体1本で切るT字紋A、単体2本で切るT字紋B、単体を複数束ねた通常の原体で切るT字紋Cの3種類が想定できるが、今回の資料ではT字紋A(36・37・84)とT字紋B(23)がみられる。これらT字紋はいずれも壺Bの頸部に施紋されると推定される。

縻状紋 櫛描原体を横走させながら定期的に止めて刺突を行っている横帯の櫛描紋。一般に刺突のための止めが等間隔の「等間隔止め」と間隔に粗密を繰り返す「多連止め」があるときれるが、今回の資料の中には後者は認められない。したがって出土土器一覧(第6表)で単に「縻状紋」と表記したものはすべて等間隔止めである。壺の頸部に単帯で用いられることが多いが(17・31・40・41・44・46・56・57・58)、まれに

壺にもみられる(1・12・24)。

拓影で提示した67の甕頸部紋様は飾描横線紋を縦沈線で規則的に切るT字紋と同様の施紋方法だが、籠状紋風の効果をねらったものと思われ、擬籠状紋というべきであろう。

条線紋 斜めまたは縦の単純な直線の飾描紋をつけたもの。同一方向に傾けた条線を横に並べて紋様帯を構成する斜行条線紋、逆の傾きの条線を横方向に交互に連ねた縦羽状条線紋、各段ごとに傾きが逆になる斜行条線紋の横帯を2段以上重ねる横羽状条線紋などがある。ここでは縦羽状条線紋がほとんどで(3・4・14・41・56・57など)、他種の条線紋をもつ土器は図示できなかった。主に甕の胴部紋様として用いられている。

波状紋 飾描原体を上下に振動させながら横走させて波状の周期曲線を施紋する飾描紋。数段を重ねて紋様帯を構成することもある。波の周期が大きく規則的な波状紋A(壺:25 胴部、甕:10・15・44・75・76)と、細かく不規則な周期・振幅の波状紋B(壺:9・22・24・25 口縁・35・37・53、甕:17・18・27・28ほか多数)の2種類がみられるが、波状紋Bの方が圧倒的に多い。波状紋Aは壺・甕の胴部上半、波状紋Bは壺・甕の口縁部及び胴部上半に主に施紋される。

また、波状紋Aは複数段に連なる波状紋群帯を構成している場合、上下の横帯の間に必ず無紋帯を設けるが、波状紋Bでは上下の横帯が接し重なることも多い。無紋帯を有する波状紋群帯を波状紋1、接し重なる波状紋群帯を波状紋2と略記し、土器観察表では波状紋A・Bと組み合わせで用いる。

波状紋のもうひとつの重要な観点に横方向の連続性がある。器体の残存状況により観察不能のものも多いが、途中で途切れなく1周するものと、何回か断絶があるものの2者が認められる。前者と判定または推測される波状紋をもつ個体として識別できたものは壺1点(25)、甕4点(10・15・29・42)で、このうち波状紋Aは10・15・25の3点、残りの2点が波状紋Bである。確実に後者と識別できた波状紋をもつ個体は4点(17・18・45・50)でいずれも甕、波状紋Bである。

ウ 縄紋

わずかではあるが縄紋が主要な紋様となっている個体がある。ただし、遺構に伴わない弥生時代中期前半のもの(49・62)を除き、縄紋が地紋にされる例はここではみられない。甕の胴部上半に横転で単節縄紋(33・48)や複節縄紋(32)が施紋されており、これらの上器の口縁部にも同一の原体による施紋がある。

エ 赤彩

高坏及び壺の一部(65)にみられる。赤彩は厳密には紋様とは異なるが、65では部位によって塗り分けられ、紋様に準じた効果をあげるように扱われている。

④ 器面調整

ア ヨコナデ

出土土器一覧(第6表)の紋様・調整欄には特記していないが、ヨコナデ調整はほとんどすべての土器の口縁部・口唇部形成に用いられていることが観察できる。

イ ハケメ

内外器面の平滑化に多用される調整手法だが、次の工程でミガキやナデ、紋様施紋によって消されている場合もある。壺・甕の内面や胴部下半などによく残っている。内外面で意図的にハケメの工具を取り替えたり、意図的にハケメを残し紋様の効果を受けようとしたと推定できるものがある。

ウ ミガキ

今回の出土土器には丁寧なミガキが観察できる個体は少ない。器面の状態があまりよくないものが多いという事情も考慮されるが、基本的にミガキが徹底して行われていたという状況は認められないと考える。図示や拓影で示したもののうち、甕は内面に横方向のミガキ、外面下部に縦方向のミガキが個体によっては散

見できる程度で、壺でも胴部上半にわずかに認められるのみである。ただし、赤彩される高環や壺の部分にはかかさず行われている。

エ その他の器面調整

ハケメと同様の効果をあげているが線条痕跡が残らない板ナデ、板状工具によるナデなどと呼ばれている調整は散見される。また、工具のあたった痕跡の始点・終点や幅が特定できない工具ナデもわずかにみられる。ケズリは明瞭なものも観察できなかった。

⑤ 上器群

今回の調査では竪穴住居址を中心とする遺構内から多数の土器が出土しているが、その出土状態は覆土中に大小の破片になって点在する状況で、一括遺物と認定できる特異な出土は確認できなかった。唯一、床に埋設された埋壺炉（土器炉）の伊体土器が使用された位置を保っているのみである。したがって、各遺構出土の土器群は個々の土器の使用、保管など日常生活時の状況を反映するものではなく、廃屋の窟地への無作為な廃棄行為または遺構埋没時の混入によって形成されたと捉え、土器埋没時のある程度の時間幅の中での土器様相（土器様式）の傾向を示すにすぎないと考えたい。

⑥ 竹瀬遺跡出土の弥生土器の特徴

ア 時期的な特徴

後期初頭の土器 住居址出土の弥生土器のほとんどは、周辺の弥生時代遺跡からの出土品と器形や紋様について比較すると、編年的には弥生時代後期初頭に掬えられると考える。中期後半～末の土器に数多くみられる器形や紋様の要素と、後期の土器に普遍的な同様の要素を今回の土器群がどのように含み、あるいは含んでいないかを概略でまとめると次のようになる。

- i) 壺において、中期後半～末に主体的な器形である壺Aや壺Bがみられる一方、後期的な器形の壺Cも存在する。
- ii) 中期末ころから認められるようになる壺の頸部縷状紋は普遍的に存在するが、すべて等間隔止めの後期的な多連止めがまったくない。
- iii) 中期後半～末の壺や甕に多くみられる口唇部の施紋ははわずかに認められるが、それらのほとんどは柳描原体によるもので、中期的な棒状施紋具や縄紋によるものは非常に少なくなっている。
- iv) 壺に中期的な棒状施紋具や縄紋を用いた紋様がみられない。
- v) 壺に後期的な紋様であるT字紋A・Bがみられる。

これらの点から、中期的な要素を残してはいるが後期的な要素が主体的に現れ始めていると判断し、後期初頭に位置付けられると考えた。もとより、個体により古い要素と新しい要素のはいり方に差があり、土器単体としては中期末的な様相の強いものや後期前半的な様相の強いものに分離することは不可能ではない。しかし、住居址ごとのまとまりで土器群として把握すると、全体的な傾向としては先述のように判断でき、むしろ住居址出土土器群の間に積極的に時間差を設定するのは現段階では躊躇される。

中期前半の土器 第11号住居址と溝3の覆土から1点ずつ図化提示できた壺(49・62)は、三角形や菱形の紋様が密に描かれ、縄紋が地紋や区画内充填になっており、今回出土の他の上器とは全く異なっている。器形も62は細頸の壺で、これらの要素は2点の壺が弥生時代中期前半に遡るものであることを示している。49の縄紋地紋に重三角を連結させる沈線紋や、62の細頸壺の連続菱形区画は、北信地方や関東の該期土器紋様に通じるものがある。南信地方の庄の畑式あるいは阿島式や北信地方の伊勢宮・新課訪町式と並行する時期に置くことができると考えたい。

イ 地域的な特徴

今回の土器群の中に、他の地域に分布の中心があるとされる紋様や器形などの要素がどの程度に混じって

いるか指摘してみたい。

櫛描紋の波状紋 A は天竜川流域に分布の中心があり、松本市域ではこれ以後の後期でもあまりみられない。今回の図示資料の中では、波状紋を持つ壺 30 例中 5 点が波状紋 A で比率は 16.7% となり、かなり高い数字といえよう。

波状紋 A1・B1 のように波状紋横帯の各段の間を意図的にあける施紋方法も以前には顕著にみられなかったもので、これも天竜川流域の影響であろう。波状紋群帯が施紋されていた図化提示個体のうち波状紋 1 と同 2 との比率は 7:6 で、波状紋 A についてはすべてが A1、波状紋 B は 4:6 となった。

壺 A の形態は頸部のくびれから強く胴が張っていく外形で、今回は全形を知り得るものがないが、胴部の中位付近に最大径があるかなり大形の壺になると推定される。在地の中期末の壺にはみられなかった特徴で、この時期にもたらされた要素と考えたい。類例をさがすと、岡谷市橋原遺跡などで主体を占める胴部の張りが強い大形の壺が相当する。ただし、口縁端部の立ち上がりは橋原例の方が高く屈曲し、伊那、飯田地方の壺に近い。この胴部の張りが強い壺 A も時期が下るとあまりみられなくなる。

ウ 松本平南部の弥生土器

松本市域の弥生時代中期後半～末の代表的な遺跡である県町、宮淵本村、百瀬などの遺跡出土の該期土器は、基本的に長野盆地に標式遺跡がある栗林式土器様式のなかで捉えられる。伊那・飯田地方の土器の要素はきわめて希薄であった。ところが今回出土の土器群は上記イで指摘したとおり天竜川流域の土器の要素をかなり含んでいる。一方、時間的には中期末の様相を残しながら後期的ないくつかの要素が認められることは上記アで列挙した。これらの事象は、松本市域南部では中期末から後期にかけて、それまでの在地の上器の順当な型式変化だけではなく、後期初頭以降に天竜川流域に核を形成する土器様相と強い結びつきが生じたことを窺わせる。今回の資料に後続する後期の良好な資料が整理・報告されていない当市の現状でこれ以上の推測はむずかしいが、地域の北と南での土器様相の違いや、この後の後期後半から末には天竜川流域の要素が再び希薄になっていく点などと絡めて追究していくべき問題であろう。

(3) 中世の土器・陶器 (第 19 図)

ピット内及び包含層、排土からわずかに出土した。陶器、内耳鍋、中世土師器皿がある。図化提示できたのは 3 点 (101～103) のみである。

101 は古瀬戸系陶器の底卸皿である。底部付高台の内面には斜放射状の沈線が刻まれている。内面見込部には 4 本の圏線がある。釉は灰釉で、透明感のある薄い緑色を呈し、一部は剥落している 14 世紀前半の所産と考えられる。

102 は内耳鍋である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口唇部は面取りして水平に整えている。耳部のため、口縁内面の工具痕は不明。

103 は在地産の須恵質摺鉢である。内面に櫛描き状の摺り目がある。摺目の単位は 6～7 本であろうか。口唇部は断面三角形に仕上げられ、体部外面は不定方向のナデが施されている。

他に図化できなかったが、排土より手捏ね土師器皿の小片、古瀬戸系陶器灰釉皿の小片が出土している。古瀬戸系陶器、土師器皿は 14 世紀前半、内耳鍋は 15 世紀以降と考えられる。

2 石器・石製品・土製品

(1) 概要

竪穴住居址覆土を中心に多量の石器が出土している。できるかぎり提示に努めたが、図化できたものは総数で 155 点にすぎない。特に、磨製石鏃及び同未成品の破片や剥片・チップなどの小片が 130 点ほど図化不能なものとして残されてしまっている。

石器の器種には、打製石鏃、磨製石鏃、スクレイパー、ピエス・エスキュー、石匙、打製石斧、石包丁、敲・砥石、台石が認められるが、数量的には磨製石鏃未成品と敲・砥石が最も多い。石材は黒曜石、チャート、砂岩、硬砂岩、泥岩、粘板岩、千枚岩、凝灰岩及び珪化作用を受けた泥岩、粘板岩、凝灰岩、泥質凝灰岩などが用いられているが、器種によって石材を限定している傾向が強い。

図化提示できた石器について、名称・出土地点・大きさ・材質などの属性を第7表に一覧で示した。また、出土地点ごとの各器種の点数を第2表に示した。

なお、第7表の石材欄の冒頭に「珪」がついているものは「珪化作用を受けた」の省略、同じく「珪強」は「珪化作用を特に強くうけた」の略である。また、長さ・幅・厚さ・重量の各欄でカッコ付きの数字は破損部につき現存長（残存重量）を示している。

(2) 器種

① 打製石鏃 (第20図1～3)

住居址覆土及び検出面から3点出土している。材質はいずれも黒曜石で、基部は凹基と平基で、無茎と有茎の両者がみられる。数量的には弥生時代中期後半の遺跡に比べて、磨製石鏃に対する比率が大きく低下しており、時期的な特性といえるだろう。

② 磨製石鏃 (第20図4～29)

住居址覆土及び検出面・排土から26点が出土し、すべてを図化提示した。ほぼ完存しているものは4点のみで、他は一部欠損品や部分的な残存にすぎない。石材は粘板岩、千枚岩、硬質粘板岩など薄く剥ぎやすいものや、珪化作用を受けた泥岩、粘板岩、凝灰岩、泥質凝灰岩などを利用している。かつて「珪岩」と表記された石材は、珪化作用を受けた泥岩、粘板岩、凝灰岩、泥質凝灰岩などを一括して指す呼称である。大きさは、長さが5cm近い大形のものから2.5cmほどの短いものまでさまざまである。形態はすべて凹基無茎で、側縁が基部から直線的にのび先端近くで曲線を描くものが多い。基部寄りに円形の貫通孔を有すが、穿孔が行われていないものが6点みられる。

③ 磨製石鏃未成品 (第20～23図30～88)

59点を図示したが、提示できなかった細片も多い。ほとんどが住居址覆土からの出土である。石材は磨製石鏃の製品と同様で、粘板岩、千枚岩、硬質粘板岩や珪化作用を受けた泥岩、粘板岩、凝灰岩、泥質凝灰岩などがみられる。

今回の出土品には磨製石鏃製作に要する各工程のものが認められる。それらの工程を示す用語としては飯田市恒川遺跡(板井弘人1986)及び松本市東町遺跡(関沢聡1990)の調査報告書に記述されたものを準用し、第7表の分類欄にもそれを用いた。

粗削(素材から適当な大きさと薄さをもった剥片を削取る段階)の工程にあるものは13点あり、その中で剥片を得るのに擦り切り技法で溝を掘って折り取る擦切施溝痕を残すものが3点みられる。56・58・59は未成品というより、その前段階のものと扱ったほうが適切かもしれない。

剥離調整(粗削した剥片の周囲に剥離を加えて成形する段階)の工程のものは22点ある。本工程の前半に行われる長辺側への剥離の段階にあるものは31・32・39・41・47・61・85・86、後半の先端部を作り出す剥離がみられるものは30・40・42・48・51・62・63・79・81などである。

研磨の工程は、身厚を薄くする平面研磨(片面研磨:研磨A、両面研磨:研磨B)、平面を二等辺三角形に成形する側縁研磨(研磨I)、基部に抉りを成形する抉部研磨(研磨II)、刃部を作出する刃部研磨(研磨III)に分類される。基本的に工程は研磨A→B、研磨I→J→Kと進むが、組み合わせによって観察されるものもある。

磨製石鏃、磨製石鏃未成品に関する遺物では、図化提示できなかったが製作の工程で生じたと推定される

剥片、チップ類も多量に出土している。調査の際に取り上げることができたものだけで125点あり、取上げが不可能だった微小なものを含めれば、数百点の剥片、チップが存在していた可能性がある。

④ スクレイパー (第23図89～92)

4点出土しているが遺構に伴うものは92(8住覆土)の1点のみである。いずれも黒曜石製。

⑤ ビース・エスキーユ (第23図93)

チャート製のものが1点出土している。下半部を欠損していて詳細はよくわからない。

⑥ 石匙 (第23図94)

石匙のつまみ部状のものが1点出土している。石錐あるいは錘の一部である可能性もある。

⑦ 使用痕のある剥片 (第23図95・96)

剥片類は多数出土しているが、使用痕が認められる2点を図示した。図中では矢印で使用痕の範囲を示している。

⑧ 打製石斧 (第23図97～103)

7点出土しているが3点は遺構外で、1点は自然流路と推定される溝3からの出土である。材質は硬砂岩、砂岩及び砂質粘板岩となっている。全形がわかるのは97・98の2点のみで、他は基部または刃部が折損している。98が楕形、101・103は短冊形を呈す。97と100は打製石斧に分類するのは不適切かもしれない。

⑨ 石包丁 (第24図104～108)

5点の出土があるが、104を除き住居址からの出土である。104は本調査に先立つ試掘の際に出土したもので、出土試掘坑(A坑)は本調査では溝2の覆土に相当する。104～106の3点は磨製石包丁、他の2点は未成品または打製の可能性がある。特に107は、貫通している2穴の他に穿孔途中の痕跡が2か所、その裏面には擦切施溝痕が不規則に残っているため、磨製石錐の素材などを石包丁に転用し、折損したので再度加工しようとしたものと推測できる。

形態は104が杏形の外湾刃、105が長方形で外湾気味の直線刃、106が長方形の直線刃である。穿孔は、104・107が2孔、105が1孔、106は折損により孔数はわからない。106以外は両側から穿孔されている。石材は粘板岩、砂質粘板岩、千枚岩及び珪化作用をうけた泥質凝灰岩である。

⑩ 敲・砥石 (第24～29図109～153)

砥面・磨面及び敲打痕をもつものを一括して扱った。明らかに砥石の形状をとるものもあったが、砥面と磨面の区別がつかず、外形が平板な楕円基調で敲打痕の散見されるものが多かったので一括した。しかし、砥石と磨石・敲石とで厳密な分離を行うべきだったかもしれない。今後の検討を要する部分である。図中で研磨範囲は平面図及び断面図の外側に付した白抜き矢印、同じく敲打範囲は普通の矢印で示し、研磨方向は平面図の内部に普通の直線矢印で示した。

大きさは、長さ×幅が5cmほどの小形のものから、20cm前後で重量が2kgを超えるものまで多様である。材質はほとんどが砂岩で、わずかに石英閃緑岩、硬砂岩が混じる。おそらく、119・123・138など断面形が長方形を呈すものは手持ち用の砥石、140・153は大形の据え置き型の砥石、148なども同様の可能性を認めたい。

⑪ 台石 (第29図154・155)

20cmを超える大形平板な石で、平坦面の中央部付近に敲打痕跡のあるものを台石とした。2点出土しているが、1点は住居址、もう1点は遺構外である。石材は砂岩と硬砂岩が用いられている。

⑫ 石製品 (第29図156～159)

管玉、紡錘車及び研磨礫(海浜石)がある。

管玉は7住出上の1点のみ。碧玉製の細型で薄緑色を呈する。

紡錘車は平板な円柱形のもので中央付近がやや厚く、中央部に直径0.85cmの貫通する円孔が1つ穿たれて

いる。典型的な弥生時代の紡錘車であろう。器面は粗い研磨を受けて平滑だが、片方の表面に長さ3cmほどの傷がある。白色凝灰岩製の完形品で、色調は灰白色だがわずかに鉄分の染みが付着している。

研磨礫という名称で分類した平板楕円角のない平滑な円礫は2点あり、海浜石や愛玩石などと呼ばれているものに類似すると考えるが、全体的に研磨の痕跡が微弱である。158は全面がかなり平滑だが、研磨によるとみられる微細な線状痕はわずかに見られるだけである。159は器面が摩滅を受けており、線状痕は観察できない。研磨礫の用途は上器の器面を磨く原体（関沢1990）との見解があり、本品も研磨に関する実用的な工具の可能性を指摘しておきたい。

⑬ 土製品（第29図160）

土製の円盤が1点出土しているのみである。土器片を削って作ったものではなく、碁石形の形態に成形したのち焼成したものとみられるが、器面が摩滅しており詳細は不明である。

(3) 石器の組成

遺構別の石器組成は第2表に示した。しかし、今回の調査では土器と同様に、石器も遺構内での使用、あるいは保管の状況を復元できる原位置にはなく、覆土中から点々と出土した。無作為の廃棄ないしは遺構埋没時の混入と考えた方が適切であろう。このため、遺構ごとの石器組成は、単にある程度の間隔の中での石器様相の傾向を示すにすぎない。

調査地全体でみると、磨製石鏃未成品を除けば、敵・砥石44.6%、打磨製石鏃25.7%、打製石斧6.9%、石包丁5.0%、スクレイパー4.0%という組成になっている。敵・砥石と、磨製石鏃が突出しており、工具や工作台と、それによって加工された石器という関連性があるのかもしれない。

磨製石鏃未成品は図化提示できたものだけでも石器総数の38.1%を占める。小片や剥片も含めるとかなりな数量になり、今回出土の石器や石材の中で磨製石鏃の製作に関わるものは群を抜いて多いといえよう。

(4) 竹河遺跡出土石器の特徴

第一は、磨製石鏃と同未成品の多さである。弥生時代中期後半～末に位置づけられている松本市泉町遺跡でも同様の状況がみられ注目されたが、本遺跡ではさらに著しい。泉町例では竅穴住居址内で磨製石鏃の生産があったと推定されて（関沢1990）おり、本遺跡では出土状態からそれを指摘するのはむずかしいが、石器組成が多量の剥片、チップの出土からみれば同様の製作形態を想定するのは困難ではない。弥生時代中期末から後期にかけて磨製の石器類が組成から消えていく中で、泉内ではもっとも遅くまで磨製石鏃が残るといって指摘（町田勝則1992）は、今回の調査結果でさらに明確になった。

第二は、石器組成において大型蛤刃石斧、偏平片刃石斧など木材加工用の石製工具をまったく欠くことである。前述の弥生中期末の泉町遺跡では磨製石鏃や同未成品のあり方が類似している一方で、大型蛤刃石斧と各種の偏平片刃石斧が確実に石器組成に伴っている。この明瞭な違いは、出土状態や石器の保有・保管に起因するのではなく、石器に代わる鉄製工具の存在、すなわち基本的に時期的な問題に帰せられると考える。石器編年だけではなく石器組成の点でも今回の資料は後期的といえるのである。

第三は、磨製石鏃に関わる石材についてである。大別して、薄い剥片が得られやすい粘板岩・千枚岩系と、硅化作用をうけた泥岩・凝灰岩・泥質凝灰岩系に分かれるが、図化提示できたものでは前者が磨製石鏃19点、同未成品45点、剥片・チップ124点、後者が磨製石鏃7点、同未成品14点、剥片・チップ6点で、前者対後者の比率は磨製石鏃73:27、同未成品76:24、剥片・チップ95:5で、総計では87:13という数字になる。中期末の泉町遺跡では磨製石鏃と同未成品における同比率が54:46であったのに比べると粘板岩・千枚岩系が大きく凌駕している。松本盆地においては該当する粘板岩・千枚岩系の産出地は北アルプス山麓（西山）に、他方は東山に推定されており、本遺跡と泉町遺跡との違いは、遺跡の位置的なことに因るのか、時期差なのか今後の課題となろう。

参考文献

- 1 関沢 聡 1990 「石器」『弥生時代の石器』『松本市文化財調査報告 No.82 松本市県町遺跡』松本市教育委員会
- 2 桜井弘人 1986 「IV-2 石器」『恒川遺跡群 遺物編』飯田市教育委員会
- 3 町田朋朋 1992 「信濃における弥生時代石器文化の終焉」第31回埋蔵文化財研究集会

第2表 竹洲遺跡遺構別石器組成一覧表

単位：個

遺物名	遺構名 3	4	5	6	7	8	9	11	12	13	溝 2	溝 3	ピット	検出 面	併 土	その 他	合 計
打製石鏃						1		1						1			3
磨製石鏃			2	5	2	6	4	2		3				1	1		26
同上未成品	4		2	3	7	10	18	4		5			1	3	1	1	59
スクレイパー						1								2	1		4
ピエス・エスキュー							1										1
石 匙								1									1
使用痕のある剥片								2									2
打製石斧					1	1		1				1		3			7
石包丁						3		1									5
敵・砥石	1	2		6		4	10	12		2	1	2		2	3		45
白 石				1					1						1		2
石製品					1	1		1									4
土製品						1											1
合 計	5	2	4	15	11	28	33	25	1	10	1	3	1	12	7	2	160
磨製石鏃剥片(g)		3.29	2.86	5.16	1.02	12.98	31.15	14.31		1.74				22.29	3.40		98.83

第3表 住居址一覧表

住居No.	掲載国	位置 主軸方向	住居址平面		柱穴	柱穴		その他の施設	時期	備考
			位置 規模(m)	面積(m ²)		柱穴 形状	柱穴 規模			
3	6	S72,W13 不明	隅丸長方形 (5.0) × (1.2)	(4.23)					弥生時代後期 初頭	
4	6	S50,W23 N 80° W	隅丸長方形 4.40 × (4.84)	(18.27)	4	中央やや東寄り 土器炉	68 × 58 × 28		弥生時代後期 初頭～前半	
5	6	S27,W11 N 90° W	楕円形 4.88 × 6.48	25.07	4	中央やや東寄り 地床炉	48 × 37 × 8	一部壁際に周溝 あり	弥生時代後期 初頭～前半	
6	7	S55,W40 N 90° W	楕円形 5.84 × 7.92	32.02	4	中央やや西寄り 土器炉	58 × 42 × 11		弥生時代後期 初頭～前半	
7	8	S26,W30 N 95° W	隅丸長方形 5.60 × 7.32	53.55	5	中央やや西寄り 土器炉	80 × 40 × 15		弥生時代後期 初頭～前半	
8	8	S75,W37 N 80° W	隅丸長方形 6.56 × 7.56	34.99	4	中央やや東寄り 土器炉	52 × 50 × 12		弥生時代後期 初頭～前半	
9	9	S63,W40 N 90° W	隅丸長方形 5.52 × 6.68	30.38	6	中央やや西寄り 土器炉	34 × 24 × 8		弥生時代後期 初頭～前半	
10	10	S13,W36 不明	円形 (4.52 × 4.56)	(11.62)					弥生時代後期 初頭～前半	
11	10	S10,W2 N 50° E	楕円形 8.84 × 6.76	46.38	4	中央やや東寄り 土器炉 中央やや東寄り 土器炉	140 × 39 × 8 44 × 36 × 8		弥生時代後期 初頭～前半	新・旧2つの炉 炉1が新炉 炉2が旧炉
12	7	S7,W30 N 95° W	楕円形 5.60 × 7.32	32.05	5	中央やや西寄り 土器炉	44 × 36 × 8		弥生時代後期 初頭～前半	
13	11	S36,W32 N 80° W	隅丸長方形 6.12 × 7.32	34.65	6	中央やや西寄り 土器炉	54 × 50 × 9		弥生時代後期 初頭～前半	
14	10	S20,W40 不明	円形 6.16 × 5.20	(15.66)					弥生時代後期 初頭～前半	

第4表 建物址一覧表

住居No.	掲載国	位置 主軸方向	建物址平面		柱穴 No.	柱穴		規模(cm)	時期	備考		
			位置 規模(m)	面積(m ²)		柱穴 形状	柱穴 規模					
3	11	S 15, W12 N 20° W	3間×1間 4.88 × 3.48	16.19	1 有 2 有 3 有 4 有	有 有 有 有	24 × 24 × 18 26 × 24 × 15 22 × 22 × 21 24 × 24 × 17	5 有 6 有 7 有 8 有	有 有 有 有	31 × 27 × 19 24 × 24 × 22 24 × 24 × 24 30 × 27 × 26	弥生時代後期 初頭～前半	
4	12	S 4, W 9 N 5° W	2間×1間 2.88 × 3.0	8.3	1 有 2 有 3 有 4 有	有 有 有 有	30 × 26 × 18 34 × 30 × 29 24 × 22 × 10 42 × 30 × 31	5 有 6 有 7 有	有 有 有	26 × 26 × 23 30 × 24 × 21 34 × 30 × 21	弥生時代後期 初頭～前半	
5	12	S 17, W32 N 87° W	4間×1間 5.64 × 3.0	16.37	1 有 2 有 3 有 4 有 5 有	有 有 有 有 有	24 × 22 × 21 30 × 26 × 18 26 × 24 × 16 28 × 26 × 27 24 × 24 × 23	6 有 7 有 8 有 9 有 10 有	有 有 有 有 有	24 × 22 × 21 24 × 20 × 19 30 × 26 × 24 28 × 26 × 20 34 × 30 × 19	弥生時代後期 初頭～前半	
6	11	S 67, W30 N 75° W	3間×1間 3.68 × 2.6	9.66	1 有 2 有 3 有 4 有	有 有 有 有	24 × 22 × 14 24 × 22 × 14 24 × 20 × 14 30 × 26 × 15	5 有 6 有 7 有 8 有	有 有 有 有	22 × 16 × 15 22 × 18 × 16 20 × 16 × 17 22 × 20 × 15	弥生時代後期 初頭～前半	
7	12	S 5, W14 N 75° E	2間×1間 2.92 × 3.0	8.4	1 有 2 有 3 有	有 有 有	30 × 30 × 24 26 × 20 × 26 26 × 24 × 17	4 有 5 有 6 有	有 有 有	32 × 24 × 15 26 × 26 × 23 40 × 28 × 34	弥生時代後期 初頭～前半	
8	12	S 44, W34 N 85° W	3間×2間 5.24 × 4.16	22.4	1 有 2 有 3 有 4 有 5 有	有 有 有 有 有	14 × 12 × 15 28 × 20 × 11 26 × 20 × 10 20 × 15 × 10 22 × 20 × 11	6 有 7 有 8 有 9 有 10 有	有 有 有 有 有	18 × 16 × 11 22 × 20 × 16 16 × 16 × 8 24 × 24 × 17 18 × 12 × 8	弥生時代後期 初頭～前半	
9	12	S 59, W23 N 75° E	2間×1間 3.60 × 2.32	6.86	1 有 2 有 3 有	有 有 有	14 × 12 × 7 16 × 16 × 10 16 × 16 × 10	4 有 5 有 6 有	有 有 有	16 × 16 × 16 14 × 12 × 12 26 × 20 × 10	弥生時代後期 初頭～前半	

第 5 表 土坑一覽表 (第 13 図)

No.	位置 (座標)	平面形	断面形	平面規模 (cm)	深 (cm)	備考
1	南西 S51,W46	橢円形	台形	108 × 94	6	弥生時代後期?
2						欠番
3	南西 S51,W44	橢円形	橢円形	176 × 206	156	中世
4	南西 S48,W49	不整橢円形	不定形	140 × 96	6	弥生時代後期?
5	南西 S47,W49	凹形	台形	74 × 74	10	弥生時代後期?
6	南西 S47,W50	不整橢円形	皿形	74 × 44	6	弥生時代後期?
7	南西 S45,W50	凹形	皿形	84 × 80	10	弥生時代後期?
8	南西 S50,W49	不整橢円形	皿形	100 × 80	22	弥生時代後期?
9						欠番
10						欠番
11	北東 S7,W10	円形	皿形	46 × 46	10	弥生時代後期?
12	北東 S9,W9	橢円形	皿形	190 × 80	8	弥生時代後期?
13	北東 S11,W8	不整橢円形	皿形	150 × 60	12	弥生時代後期?
14	北東 S12,W8	橢円形	皿形	90 × 46	10	弥生時代後期?
15	北東 S12,W10	円形	不定形	60 × 60	8	弥生時代後期?
16	北東 S13,W6	橢円形	橢円形	52 × 42	10	弥生時代後期?
17	南西 S65,W44	凹形	皿形	90 × 80	10	弥生時代後期?
18	南西 S72,W44	方形	橢円形	54 × 54	18	弥生時代後期?
19	北西 S20,W37	橢円形	台形	90 × 48	20	弥生時代後期?
20	北東 S13,W17	方形	台形	74 × 60	12	弥生時代後期?
21	北東 S3,W8	不整橢円形	不定形	70 × 24	10	弥生時代後期?
22	中央北 S20,W27	不整方形	台形	144 × 44	14	中世
23	中央西 S42,W40	橢円形	長方形	194 × 146	40	中世

第6表 出土器一覽表

番号	器種	式	寸法	出土層	色調	胎土	施文	外観	内観	重量	調査	備考
1	4作	甕		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.7	4.4.10.34	
2	4作	Bb	18.2	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.1	4.4.10.33	
3	4作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.2	4.4.10.36	形体
4	4作	C		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.5	4.4.10.37	形体
5	4作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.3	4.4.10.38	形体
6	4作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.4	4.4.10.40	
7	4作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	4.5	4.4.10.17	
8	5作	B	16.1	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	5.1	5.1.10.57	
9	6作	B	1/3	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	6.3	6.3.10.11	
10	6作	C	22.0	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	6.3	6.3.10.2-3, 4	形体
11	6作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	6.1	6.1.10.57	
12	7作	B	21.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	7.2	7.2.10.14	
13	7作	B	12.0	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	7.1	7.1.10.35	
14	7作	C	13.8	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	7.4	7.4.10.3	形体
15	7作	C		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	7.3	7.3.10.1-2, 8	形体
16	7作	B	21.3	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	7.5	7.5.10.12	
17	8作	B	17.5	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	8.3	8.3.10.55	
18	8作	B	19.6	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	8.2	8.2.10.54	
19	8作	C	17.1	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	8.4	8.4.10.65	
20	8作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	8.5	8.5.10.47	
21	8作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	8.6	8.6.10.74	
22	9作	A		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.2	9.2.10.15	
23	9作	A	20.6	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.1	9.1.10.104-97-113	
24	9作	A	21.0	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.3	9.3.10.126	
25	9作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.1	9.1.10.104	
26	9作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.4	9.4.10.100	
27	9作	B	12.9	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.5	9.5.10.122-5E7	
28	9作	B	11.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.1	9.1.10.107	
29	9作	B	17.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.2	9.2.10.107	
30	9作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.7	9.7.10.58-79-12-3	
31	9作	Bb	26.7	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.10	9.10.110	
32	9作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.8	9.8.10.1	形体
33	9作	Bb	23.8	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.9	9.9.10.7	
34	9作	B	8.1	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	9.3	9.3.10.119-120	
35	11作	B	10.6	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.1	11.1.10.1	
36	11作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.10	11.10.10.1	形体(伊1)
37	11作	B	27.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.13	11.13.10.10	
38	11作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.7	11.7.10.10	
39	11作	B	15.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.3	11.3.10.17, 19	
40	11作	B	22.0	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.5	11.5.10.17, 19	
41	11作	B	53.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.1	11.1.10.1	形体(伊1)
42	11作	B	25.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.2	11.2.10.1	
43	11作	B	25.4	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.2	11.2.10.1	
44	11作	B	21.9	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.4	11.4.10.15, 18, NE	形体(伊2)
45	11作	B	23.8	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.4	11.4.10.18	形体(伊2)
46	11作	B	23.8	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.4	11.4.10.18	形体(伊2)
47	11作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.4	11.4.10.18	形体(伊2)
48	11作	B	21.2	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.6	11.6.10.1	形体(伊2)
49	11作	B	5.0	埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	11.2	11.2.10.1	形体(伊2)
50	12作	B		埋藏層A	褐色	石灰、黄土、赤褐色		口縁2段	ハナメ	12.1	12.1.10.1	形体(伊2)

第7表 出土石器・石製品一覽表

No	種名	分類	地産	破損状況	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	特徴	出所	備註
1	打石石器	凹形錐	8住	片斷欠	2.50	1.62	0.38	(0.75)	黒曜石	8住 No11	
2	打石石器	平基有茎	11住	完形	2.06	1.49	0.49	1.25	黒曜石	11住 No1	
3	打石石器	凹形錐	檢出	完形	2.63	1.49	0.29	0.80	黒曜石	檢出	
4	磨製石	5住	龜形欠	(3.11)	1.71	0.29	(1.60)	(鉄) 泥質粘板岩	5住 No2		
5	磨製石	5住	一部残	(2.47)	(1.51)	(0.21)	(0.90)	(鉄) 泥質粘板岩	5住 No1		
6	磨製石	6住	下部欠	(3.71)	(1.31)	0.2	(1.30)	(鉄) 泥質粘板岩	6住 No6		
7	磨製石	6住	先端欠	(2.22)	1.71	0.24	(1.00)	泥質粘板岩	6住 No7、再加工中か		
8	磨製石	6住	上部・脚端欠	(2.28)	2.35	0.25	(2.35)	(鉄) 泥質粘板岩	6住 No1、再加工中か		
9	磨製石	6住	一部残	(1.40)	1.58	0.20	(1.05)	粘板岩	6住 No8		
10	磨製石	6住	一部残	(1.82)	(1.20)	(0.15)	(0.50)	泥質粘板岩	6住 No5、孔不明		
11	磨製石	7住	ほぼ完形	(4.95)	1.94	0.27	(3.45)	泥質粘板岩	7住 No4		
12	磨製石	7住	完形	2.58	1.61	0.17	0.85	泥質粘板岩	7住 No9、孔なし		
13	磨製石	8住	未完	3.10	2.21	0.28	2.70	粘板岩	8住 No9 (假研研中)		
14	磨製石	8住	未完	(3.08)	1.92	0.27	(1.45)	粘板岩	8住 No1、再加工中		
15	磨製石	8住	上部欠	(4.15)	2.35	0.31	(4.40)	粘板岩	8住 No1		
16	磨製石	8住	完形	2.45	1.76	0.23	1.05	(鉄) 粘板岩	8住 No18		
17	磨製石	8住	先端・片斷欠	(3.15)	1.23	0.18	(2.20)	泥質粘板岩	8住 No17		
18	磨製石	8住	一部残	(1.40)	(0.99)	(0.21)	(0.40)	(鉄) 粘板岩	8住 No1		
19	磨製石	9住	脚端欠	(6.96)	(1.85)	0.19	(1.50)	泥質粘板岩	9住 南東覆土、孔なし		
20	磨製石	9住	ほぼ完形	(3.05)	1.60	0.25	(1.45)	(鉄) 粘板岩	9住 No8		
21	磨製石	9住	片斷欠	3.69	1.19	0.16	(0.95)	粘板岩	9住 No4、孔なし		
22	磨製石	9住	一部残	(3.21)	(1.20)	0.23	(1.05)	(鉄) 泥質粘板岩	9住 No5		
23	磨製石	11住	ほぼ完形	3.65	1.28	0.2	1.05	(鉄) 泥質粘板岩	11住 No24、孔なし		
24	磨製石	11住	片斷・脚端欠	(4.05)	(1.95)	0.3	(2.70)	(鉄) 泥質粘板岩	11住 No3、被熱		
25	磨製石	13住	上部・脚端欠	(3.24)	1.52	0.27	(1.85)	粘板岩	13住 No1		
26	磨製石	13住	先端・脚端欠	(2.39)	2.01	0.24	(1.35)	粘板岩	13住 No3		
27	磨製石	13住	一部残	(1.90)	(1.51)	0.31	(0.95)	(鉄) 泥質粘板岩	13住 No9		
28	磨製石	檢出	上部脚端・脚欠	(3.05)	(3.05)	2.01	(3.05)	粘板岩	檢出		
29	磨製石	検土	一部残	(2.14)	(1.90)	0.29	(1.45)	粘板岩	検土		
30	周米成品	酒樽調整	3住	4.71	2.12	0.45	5.20	泥質粘板岩	3住 No1		
31	周米成品	酒樽調整	3住	5.91	2.19	0.30	6.45	泥質粘板岩	3住 No2		
32	周米成品	酒樽調整	3住	4.30	2.31	0.31	4.85	(鉄) 粘板岩	3住 No1		
33	周米成品	研磨 I A	3住	脚端欠	(2.11)	(1.75)	0.10	(0.40)	粘板岩	3住 No1	
34	周米成品	研磨 I A	5住	一部残	(2.01)	(1.54)	(0.26)	(0.80)	泥質粘板岩	5住 No4	
35	周米成品	研磨 I A	5住	上・下部欠	(2.45)	(1.32)	(0.18)	(0.80)	泥質粘板岩	5住 No3	
36	周米成品	酒樽調整	6住	3.50	1.73	0.24	2.25	泥質粘板岩	6住 No4		
37	周米成品	酒樽調整	6住	5.29	1.81	0.35	5.05	粘板岩	6住 No1		
38	周米成品	研磨	7住	一部残	(2.98)	(1.53)	(0.20)	(1.15)	粘板岩	6住 No1、剥落欠損	
39	周米成品	研磨 A	7住	8.02	3.30	0.54	20.80	粘板岩	7住 No1		
40	周米成品	酒樽調整	7住	7.78	2.98	0.61	15.85	粘板岩	7住 No11		
41	周米成品	酒樽調整	7住	5.49	3.42	0.31	8.55	泥質粘板岩	7住 No2		
42	周米成品	酒樽調整	7住	5.92	2.60	0.49	8.15	粘板岩	7住 No6		
43	周米成品	酒樽調整	7住	4.03	1.80	0.29	2.95	粘板岩	7住 No8		
44	周米成品	研磨 I B	7住	上部・片斷欠	(3.69)	(2.02)	(0.22)	(3.25)	泥質粘板岩	7住 No10	
45	周米成品	研磨 I B	7住	上部欠	(3.31)	2.58	0.32	(3.20)	泥質粘板岩	7住 No7	
46	周米成品	研磨	8住	6.13	5.31	0.45	17.30	粘板岩	8住 No16		
47	周米成品	研磨	8住	5.04	3.48	0.48	13.05	粘板岩	8住 No4		
48	周米成品	研磨	8住	4.53	2.00	0.23	3.25	粘板岩	8住 No6		
49	周米成品	研磨	8住	1.78	1.25	0.10	0.55	粘板岩	8住 南東覆土		
50	周米成品	研磨	8住	7.32	2.79	0.60	9.10	粘板岩	8住 No8		
51	周米成品	酒樽調整	8住	3.75	2.49	0.31	4.15	粘板岩	8住 No3		
52	周米成品	研磨 A	8住	8.23	2.09	0.49	12.10	(鉄) 泥質粘板岩	8住 No21		
53	周米成品	研磨 A	8住	上部欠	(3.08)	2.75	0.28	(4.05)	粘板岩	8住 No13	
54	周米成品	研磨 I B	8住	4.98	2.18	0.36	4.80	(鉄) 泥質粘板岩	8住 No5		
55	周米成品	研磨 II	8住	上部・片斷欠	(1.59)	(1.22)	0.19	(0.45)	粘板岩	8住 No1	
56	周米成品	研磨	9住	4.90	3.61	0.35	6.40	(鉄) 粘板岩	9住 No129、擦切面あり		
57	周米成品	研磨	9住	4.93	1.39	0.28	3.70	泥質粘板岩	9住 No23		
58	周米成品	研磨	9住	4.68	3.92	0.49	16.9	粘板岩	9住 No14、擦切面あり		
59	周米成品	研磨	9住	4.69	5.57	0.65	19.4	粘板岩	9住 No13		
60	周米成品	酒樽調整	9住	5.26	1.60	0.31	2.65	(鉄) 泥質粘板岩	9住 No9		
61	周米成品	酒樽調整	9住	5.91	2.19	0.40	6.05	粘板岩	9住		
62	周米成品	酒樽調整	9住	4.68	1.98	0.42	6.10	粘板岩	9住 No27		
63	周米成品	酒樽調整	9住	2.94	2.05	0.28	2.60	粘板岩	9住 No16		
64	周米成品	酒樽調整	9住	4.35	2.40	0.41	4.70	(鉄) 粘板岩	9住 No19		
65	周米成品	研磨 B	9住	4.64	2.11	0.39	5.25	(鉄) 泥質粘板岩	9住 No1		
66	周米成品	研磨 A	9住	4.05	1.40	0.37	2.65	(鉄) 粘板岩	9住 No12		
67	周米成品	研磨 A	9住	3.21	1.98	0.31	2.35	泥質粘板岩	9住 No25		
68	周米成品	研磨 I B	9住	3.34	1.65	0.25	2.95	泥質粘板岩	9住 No29		
69	周米成品	研磨 II	9住	6.35	2.24	0.27	5.95	(鉄) 泥質粘板岩	9住 No28		
70	周米成品	研磨 I B	9住	上・下部欠	(2.37)	(1.88)	0.26	(1.70)	粘板岩	9住 No5	
71	周米成品	研磨 I B	9住	上・下部欠	(2.59)	(1.71)	0.21	(1.25)	粘板岩	9住 No24	
72	周米成品	研磨 I B	9住	片斷欠	(2.97)	(1.91)	0.24	(1.65)	泥質粘板岩	9住 No17	
73	周米成品	研磨 I B	9住	上部欠	(2.83)	3.12	0.41	(6.15)	(鉄) 泥質粘板岩	9住 北西覆土	
74	周米成品	研磨	11住	6.51	3.70	0.48	17.30	粘板岩	11住 No1、擦切面あり		
75	周米成品	研磨 B	11住	一部残	(4.39)	(1.48)	(0.32)	(2.55)	粘板岩	11住 No6	
76	周米成品	研磨 II	11住	6.01	2.85	0.25	6.65	泥質粘板岩	11住 No1		
77	周米成品	研磨 III	11住	一部欠	(2.62)	(1.51)	0.21	(1.10)	粘板岩	11住 No5	
78	周米成品	研磨	13住	下部欠	(2.47)	1.25	0.13	(0.45)	粘板岩	13住 No8	
79	周米成品	酒樽調整	13住	(3.55)	1.58	0.28	(1.90)	(鉄) 泥質粘板岩	13住 No10		
80	周米成品	酒樽調整	13住	上・下部欠	(2.91)	(2.20)	(0.36)	(3.25)	(鉄) 泥質粘板岩	13住 No1	
81	周米成品	酒樽調整	13住	3.42	1.49	0.27	1.85	(鉄) 泥質粘板岩	13住 No5		

No	品名	分類	高さ	材質・破損状況	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	材質	取付・備考
82	河床完成品	河床調整	13 住		4.11	2.65	0.45	6.85	(住) 磨質凝灰岩	13 住 No1
83	河床完成品	河床調整	P14 住	上部欠	(6.55)	3.01	0.62	(17.15)	千枚岩	P14No8
84	河床完成品	河床調整	橋上		3.41	1.65	0.38	2.70	千枚岩	橋上面
85	河床完成品	河床調整	橋上	上部欠	(7.46)	2.30	0.45	(9.60)	(住) 磨質凝灰岩	橋上面 No3、重純あり
86	河床完成品	河床調整	橋上面		7.36	3.58	0.55	18.65	粘板岩	橋上面 No3、重純あり
87	河床完成品	河床調整	不明		3.15	1.55	0.38	1.70	粘板岩	出土不明
88	河床完成品	河床調整	橋上面	上・下部欠	(3.88)	(2.18)	0.20	(3.40)	(住) 磨質凝灰岩	橋上面
89	スクレイパー		橋上面	変形	2.95	1.01	0.38	1.50	黒曜石	橋上面
90	スクレイパー		橋上面	変形	2.25	0.71	0.31	0.45	黒曜石	橋上面
91	スクレイパー		橋上	変形	1.68	1.81	0.53	1.90	黒曜石	橋上
92	スクレイパー		8 住	変形	4.10	1.68	0.71	4.40	黒曜石	8 住 No10
93	ビス・ナット		9 住	変形	(2.35)	(3.05)	(0.90)	(6.30)	チャート	9 住北西露土
94	石 筋		11 住		(1.63)	(1.38)	(0.45)	(1.10)	黒曜石	11 住南西丁、つまみ形 (溝・溝か)
95	使用済のある割片		11 住	変形	0.98	1.59	0.51	2.40	黒曜石	11 住
96	使用済のある割片		11 住	変形	1.36	2.23	0.52	1.40	黒曜石	11 住
97	打撃石弁		橋上面	変形	5.38	5.32	1.27	33.6	硬砂岩	橋上面、スクレイパーか
98	打撃石弁		3 溝	変形	17.05	7.82	2.59	38.5	砂岩	3 溝 No8、万部に使用痕あり
99	打撃石弁		橋上面	下部欠	(6.52)	(4.02)	(1.08)	(35.8)	砂岩	橋上面 No2
100	打撃石弁		11 住	上方向部欠	(12.15)	(8.45)	2.82	(35.0)	砂岩	11 住露土
101	打撃石弁		橋上面	上方向部欠	(12.30)	(4.92)	(1.50)	(13.0)	砂質粘板岩	橋上面 No5、万部に使用痕あり
102	打撃石弁		7 住	下部欠	(10.85)	(7.04)	(2.32)	(26.0)	砂岩	7 住 No42
103	打撃石弁		8 住	下部欠	(9.15)	(4.01)	(1.85)	(10.0)	砂質粘板岩	8 住 No2
104	磨製石包丁		A 階	変形	4.85	11.68	0.78	61.85	砂質粘板岩	A 階西4層
105	磨製石包丁		8 住	変形	3.48	7.85	0.82	34.45	(住) 磨質凝灰岩	8 住 No2
106	磨製石包丁		8 住	半部欠	2.36	(5.43)	0.32	(9.50)	粘板岩	8 住 No7
107	石 包丁		8 住		3.46	5.22	0.32	10.65	粘板岩	8 住 No23、転用加工中か
108	石 包丁	敲打痕 露土	11 住	(半露欠)	(3.72)	(5.30)	(0.28)	(8.95)	千枚岩	11 住東露土、未測定
109	磨・磨石		3 住	変形	12.78	8.12	2.05	330	砂岩	3 住
110	磨・磨石		4 住	変形	7.91	4.74	2.12	110	砂岩	4 住
111	磨・磨石		4 住	変形	16.68	10.88	3.15	770	砂岩	4 住 No44、縁割りがギザギザする
112	磨・磨石		6 住	半部欠	(7.05)	(5.45)	(5.25)	(335)	砂岩	6 住 No21、縁割りがギザギザする
113	磨・磨石		6 住	変形	14.52	8.42	3.62	590	砂岩	6 住 No15
114	磨・磨石		6 住	変形	9.28	12.22	6.92	985	硬砂岩	6 住 No17、断面・表面共に割しい
115	磨・磨石		6 住	変形	21.28	18.96	3.92	2375	砂岩	6 住 No12
116	磨・磨石		6 住	ほぼ変形	8.12	4.52	2.48	(130)	砂岩	6 住 No9
117	磨・磨石		8 住	半部欠	18.01	(9.82)	3.38	(765)	砂岩	8 住 No49、縁割れか白石に利用か
118	磨・磨石		8 住	変形	6.82	4.36	2.72	105	石突閃緑岩	8 住 No45
119	磨・磨石		8 住	変形	9.31	4.65	3.10	220	砂岩	8 住、断面は滑か
120	磨・磨石		8 住	変形	13.35	12.54	6.92	1555	石突閃緑岩	8 住 No51、断面は全面
121	磨・磨石		9 住	半部欠	(20.97)	(17.94)	4.62	(2690)	砂岩	9 住 No128
122	磨・磨石		9 住	変形	9.49	7.08	4.18	325	石突閃緑岩	9 住 No127
123	磨・磨石		9 住	半部欠	(7.10)	4.25	(1.45)	(75)	砂岩	9 住 No41
124	磨・磨石		9 住	一部欠	(8.76)	(3.82)	(3.91)	(155)	砂岩	9 住 No113
125	磨・磨石		9 住	変形	14.85	6.73	3.96	415	砂岩	9 住 No108
126	磨・磨石		9 住	変形	9.61	6.52	4.46	445	砂岩	9 住 No109、断面は顔面化
127	磨・磨石		9 住	一部欠	(4.30)	(5.42)	(2.02)	(70)	砂岩	9 住 No96
128	磨・磨石		9 住	変形	4.66	5.95	1.92	60	砂岩	9 住
129	磨・磨石		9 住	変形	11.68	7.25	2.79	325	砂岩	9 住 No78
130	磨・磨石		9 住	半部欠	(8.55)	8.25	3.24	(345)	砂岩	9 住 No107
131	磨・磨石		11 住	変形	7.98	5.36	1.74	95	砂岩	11 住橋上面、軟質な石材
132	磨・磨石		11 住	変形	16.67	8.65	3.54	745	砂岩	11 住 No19
133	磨・磨石		11 住	片部欠	(14.46)	4.61	(3.30)	(220)	砂岩 (実質)	11 住
134	磨・磨石		11 住	一部欠	5.98	6.75	3.61	250	砂岩	11 住橋上面
135	磨・磨石		11 住	変形	8.78	5.43	1.82	135	砂岩	11 住
136	磨・磨石		11 住	半部欠	(9.23)	(3.15)	(2.32)	(95)	砂岩	11 住 P9
137	磨・磨石		11 住	一部欠	(9.48)	(5.78)	(2.14)	(115)	砂岩	11 住床面
138	磨・磨石		11 住	隣接欠	(7.45)	(5.38)	(3.24)	(205)	砂岩	11 住 No2、縁割れより2面顔面化
139	磨・磨石		11 住	片面部欠	11.32	(3.38)	(1.70)	(95)	チャート	11 住 No7
140	磨・磨石		11 住	1/4 欠	(19.42)	(13.42)	5.86	(9100)	硬砂岩	11 住 No21
141	磨・磨石		11 住	変形	5.61	3.74	1.82	55	砂岩	11 住 No22
142	磨・磨石		11 住	半部欠	(8.81)	7.61	4.73	(530)	閃緑岩	11 住 No8、軟質石弁を転用
143	磨・磨石		13 住	変形	11.21	5.94	3.65	335	砂岩	13 住 No2
144	磨・磨石		13 住	変形	10.38	5.80	2.51	230	砂岩	13 住 No31
145	磨・磨石		溝2	半部欠	(11.25)	9.32	5.20	(640)	砂岩 (花崗質)	溝2
146	磨・磨石		溝3	変形	4.35	5.78	3.49	140	砂岩	溝3
147	磨・磨石		溝3	半部欠	(9.98)	6.14	(4.28)	(305)	砂岩	溝3
148	磨・磨石		橋上面	変形	21.84	7.72	6.61	1725	砂岩	橋上面
149	磨・磨石		橋上面	変形	14.98	5.72	2.95	320	砂岩	橋上面
150	磨・磨石		溝1	変形	11.41	4.32	2.62	170	砂岩	溝1
151	磨・磨石		溝1	変形	12.84	4.49	2.42	215	砂岩 (実質)	溝1
152	磨・磨石		溝1	変形	12.79	5.65	2.28	290	砂岩	溝1
153	磨・磨石		6 住	変形	31.60	20.82	9.15	694	硬砂岩	6 住 No16、片面顔面化
154	磨・磨石		6 住	変形	27.03	23.42	5.05	5820	硬砂岩	6 住 No10、片面顔面化寸前
155	磨・磨石		溝1	変形	(22.86)	(12.81)	(5.25)	(2450)	砂岩	溝1
156	石 製品		7 住	変形	1.38	0.26	0.23	0.15	珪石	7 住 No1、孔径 0.12cm
157	石 製品		12 住	変形	5.39	5.22	1.02	37.40	白色凝灰岩	12 住 No1、孔径 0.85cm
158	石 製品		8 住	変形	5.23	4.08	0.89	30.35	硬砂岩	8 住 No15、全面平滑
159	石 製品		11 住	変形	4.86	4.28	1.25	34.50	砂質粘板岩	11 住 No23
160	石 製品		8 住	変形	2.86	2.75	0.71	6.30		8 住 No14

第4章 調査のまとめ

竹測遺跡の調査は、昭和60年に引き続き2回目となる。成果としては弥生時代後期の住居址12軒、建物址7棟が検出され、前回確認できなかった弥生時代の集落址の一端を垣間見ることができた。今回の調査で確認された遺構について、若干の考察を試みたい。

1 弥生時代集落の範囲

今回の調査地は、前回の場所から南へ300m程の場所である。この周辺では、古くから弥生土器が出土することが知られていたが、前回の調査では遺構等の確認はなかった。今回は3,471㎡に及ぶ調査地内全域から住居址や建物址を検出し、弥生時代の集落址の一端を捉えることができた。また、調査地の西端を南北に流れる3溝は、出土遺物がからみて住居址等より時期的に遡る可能性があり、幅広く土層に流路痕がみられたことから、集落形成時には既に存在していた緩やかな流れの自然流路で、集落の西側を規定していたものとも考えられる。このことから、集落址の範囲はこれより東側へ広がっていると推定する。

2 住居址と建物址

今回調査した集落は弥生時代後期初頭～前半の限られた時間幅に取まるもので、建物址が多く確認されたことで注目される。特に建物址の在り方は、11住と3・4・7建、7・12住と5建、13住と8建、4住と9建というように竪穴住居址とセット関係が認められる状況の平面配置で、非常に興味深い。建物の用途は明らかではないが、すべて細い柱の側柱式で棟数が多く、平面形が長方形を基調としていることから、平地式の住居か、それに準じたものであったと考えたい。また竪穴住居址とセットで確認されているという点については、この時代の集落内での住居群の在り方、あるいは住み分けの問題という観点からの分析も必要であろう。

3 環状の溝状遺構

住居址としたもののうち10住と14住は周溝のみが残存する住居址で、本文で述べたとおり、これらを住居址と考えるかどうかは疑問点もある。長野市の松原遺跡において多数確認されている環状溝跡や、北陸地方から報告されている多くの事例との類似性から、これら住居址の性格について考えてみたい。新潟県や石川県など北陸各県で検出されている平地式住居を囲む環状の溝の特徴については、①周溝があること、②周溝の中央にピット群があること、③竪穴住居址のように落ち込みがない、また主柱穴から周溝までに広い空間があること、④同一箇所を立て替えているものもあり、立地場所へのこだわりが見られること、とされている。今回確認された10住と14住は、10住でピットが1個確認されているのみで、内側には住居址と思しき遺構は見られない。また、規模も北陸地方の事例と比較してかなり小さい。今回は「周溝を有する平地式住居」の可能性があると住居址に分類したが、もとより最終的な見解ではない。遺物は、少量ながら弥生土器片が溝内から出土しており、時期は弥生時代後期初頭とみて間違いはなからう。県内からはまだ報告例も少なく、今後調査事例の増加による解明を期待したい。

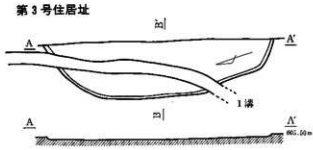
最後になりましたが、記録的な猛暑の中、発掘作業に参加して頂いた皆様、また調査の実施に際しては多大なご理解を頂いた松本市竹測南土地区画整理組合、竹測町会の皆様には厚くお礼申し上げます。

参考文献

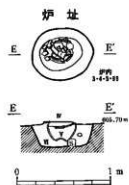
金沢市教育委員会 1991『金沢市新保本町東遺跡』

長野市教育委員会 1991『松原遺跡』

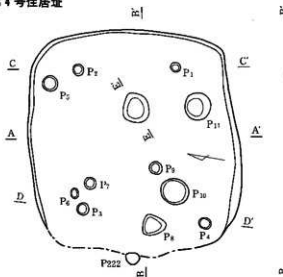
第3号住居址



炉址

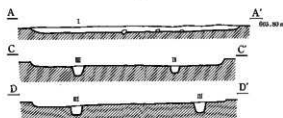
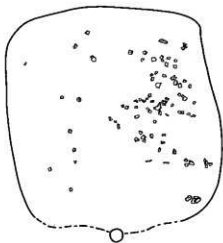


第4号住居址

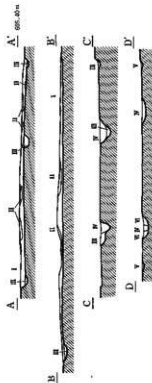
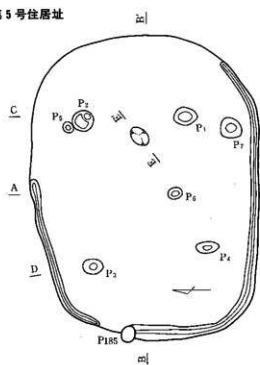


- I : 11 (G-H-F)
- II : 12 (E-F)
- III : 13 (C-D)
- IV : 14 (F)
- V : 21
- VI : 8 (G)

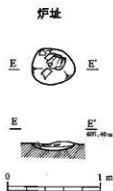
出土状况



第5号住居址



炉址

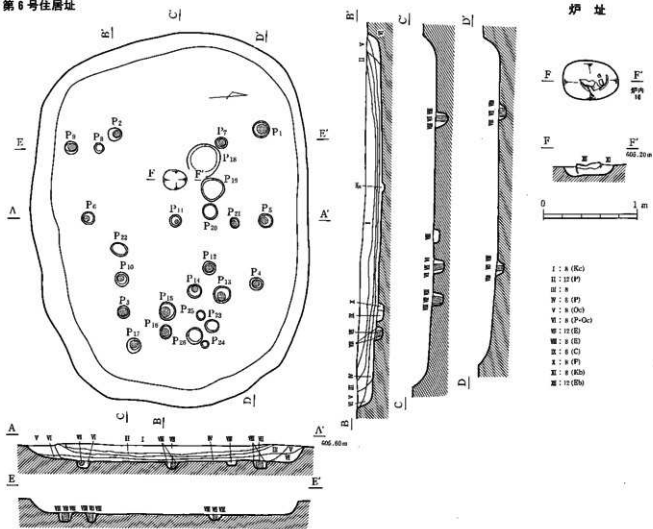


- I : 8 (P-3)
- II : 11 (G)
- III : 8 (F)
- IV : 21 (G)
- V : 8 (E-F)
- VI : 10

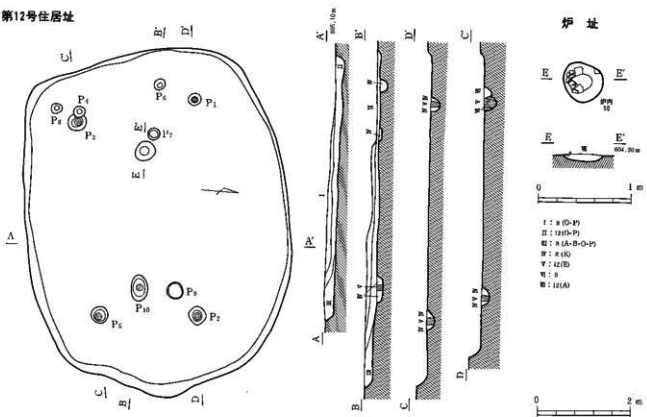


第6图 第3~5号住居址

第6号住居址

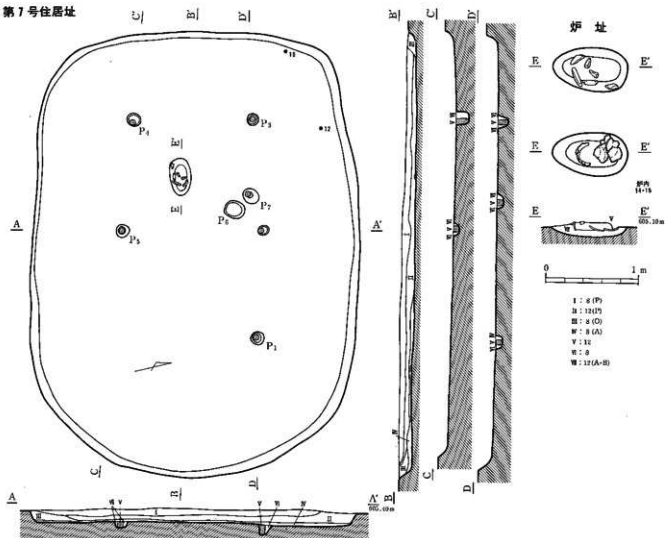


第12号住居址

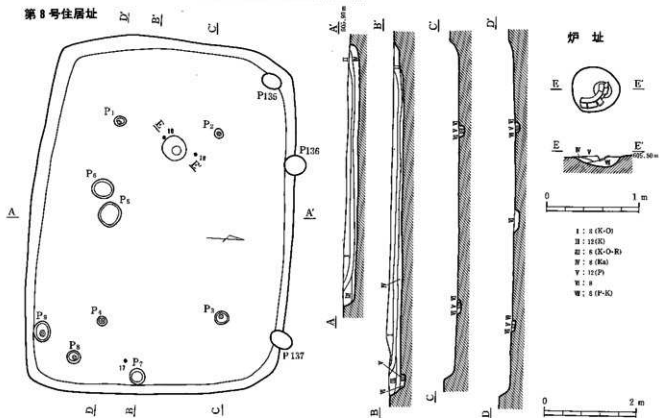


第7图 第6・12号住居址

第7号住居址

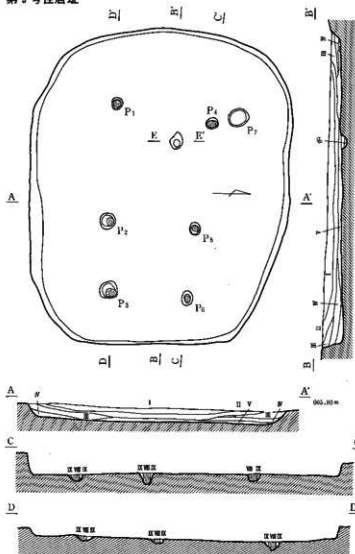


第8号住居址

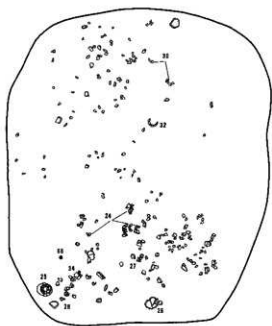


第8图 第7・8号住居址

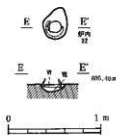
第9号住居址



出土状况

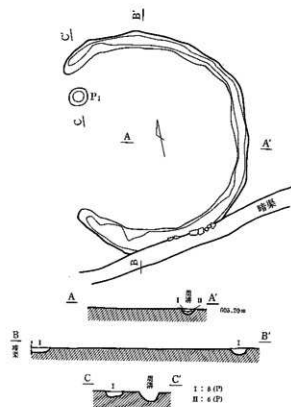


炉址



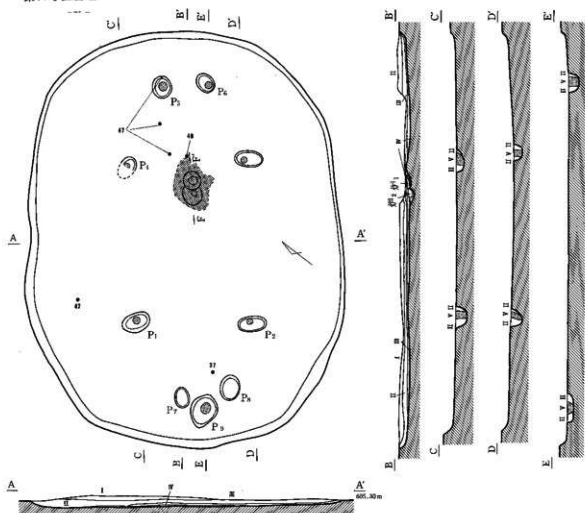
- I : 4 (B)
- II : 12 (F)
- III : 8 (D)
- IV : 4 (E)
- V : 8
- VI : 12 (G-C)
- VII : 12 (H-K)
- VIII : 12 (I)
- IX : 4 (P)

第10号住居址

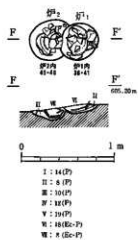


第9图 第9・10号住居址

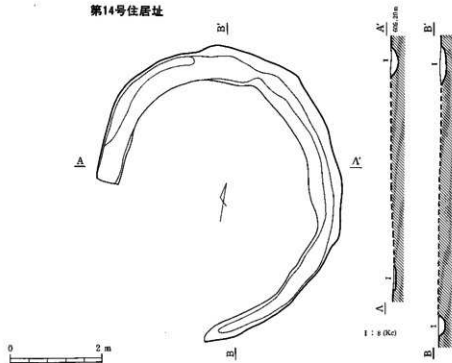
第11号住居址



炉址

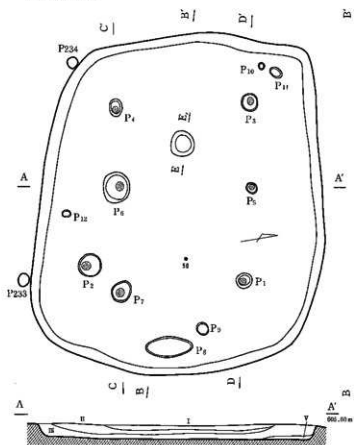


第14号住居址

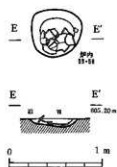


第10图 第11・14号住居址

第13号住居址

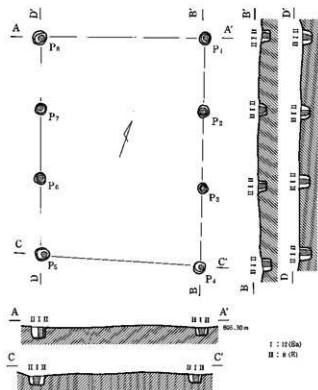


炉 址

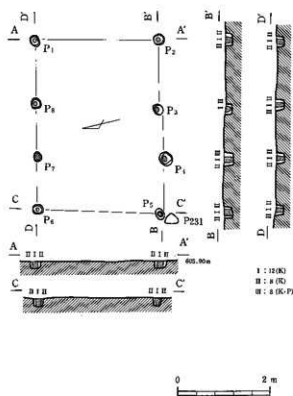


- I : Ⅱ (K)
- Ⅱ : Ⅲ (K)
- Ⅲ : Ⅳ (K)
- Ⅳ : Ⅴ (K-O)
- Ⅴ : Ⅵ (K)
- Ⅵ : Ⅶ (K-P)
- Ⅶ : Ⅷ (K-P)

第 3 号掘立柱建物址

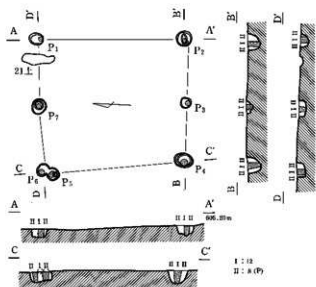


第 6 号掘立柱建物址

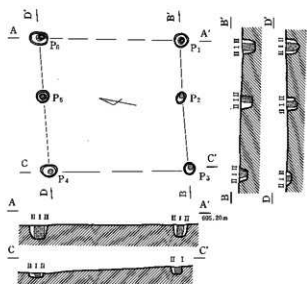
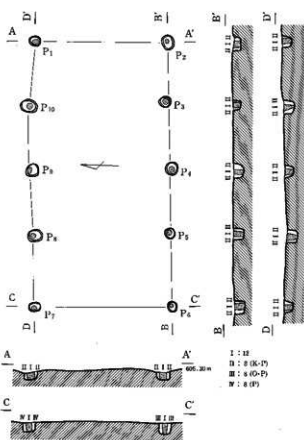


第11图 第13号住居址、第3・6号掘立柱建物址

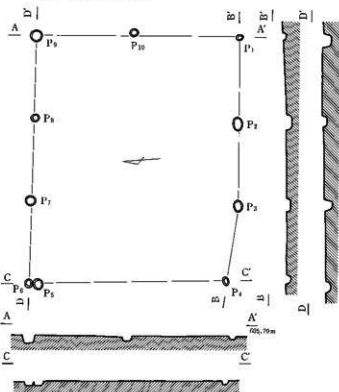
第 4 号掘立柱建物址



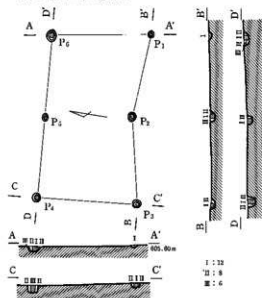
第 5 号掘立柱建物址



第 8 号掘立柱建物址



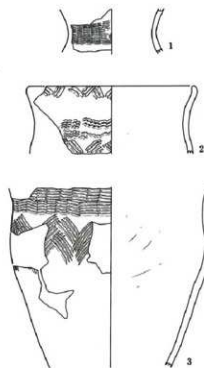
第 9 号掘立柱建物址



第12图 第 4・5・7~9号掘立柱建物址



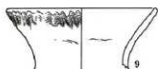
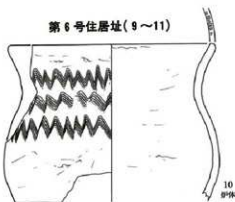
第4号住居址(1~7)



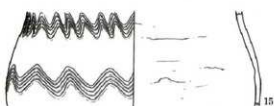
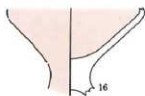
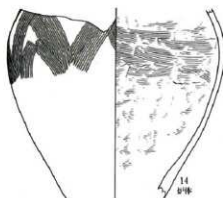
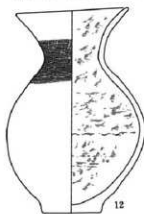
第5号住居址(8)



第6号住居址(9~11)



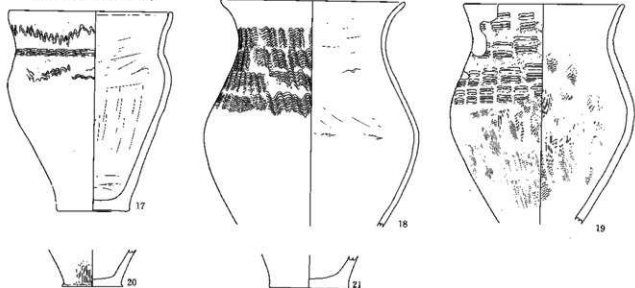
第7号住居址(12~16)



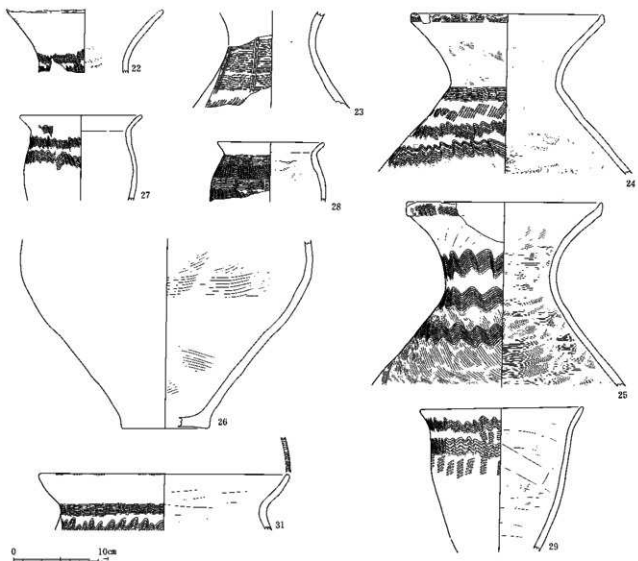
0 10 cm

第14回 土器・陶器 (1)

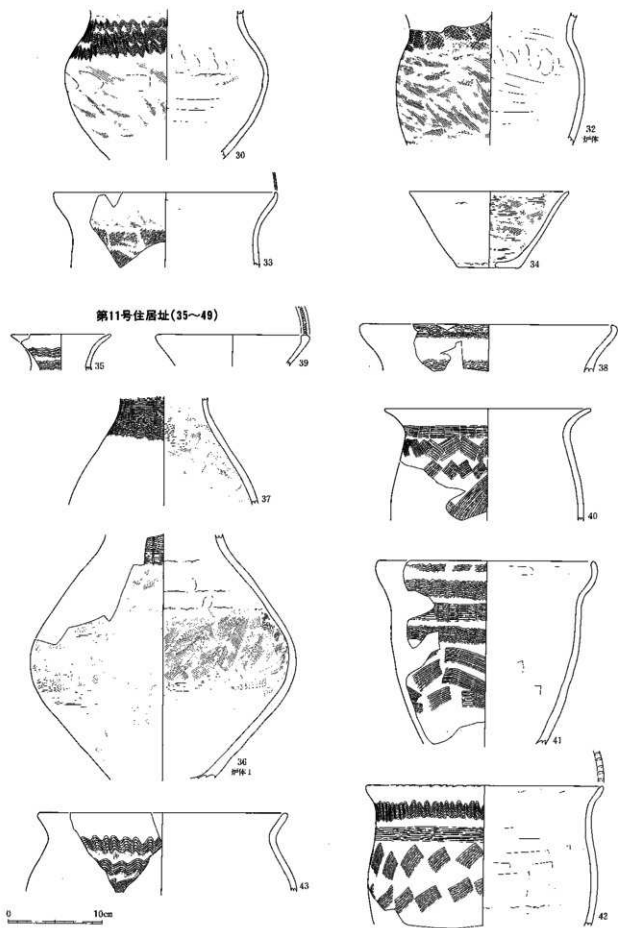
第 8 号住居址(17~21)



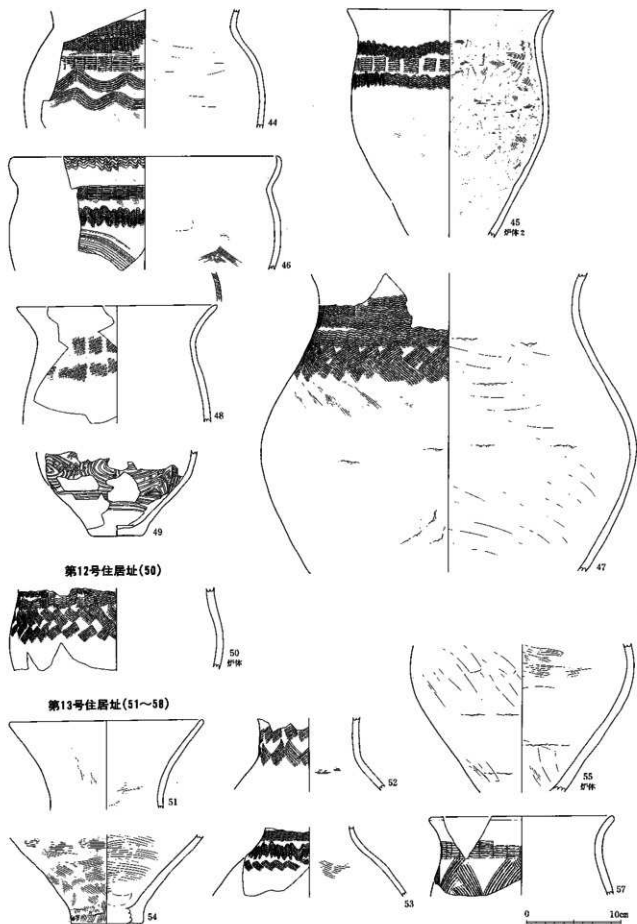
第 9 号住居址(22~34)



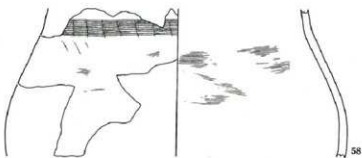
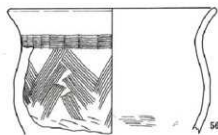
第15回 土器・陶器 (2)



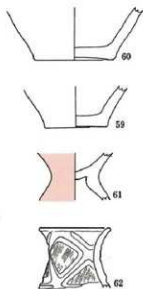
第16图 土器・陶器 (3)



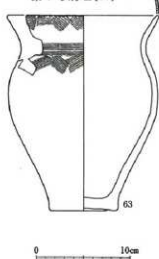
第17回 土器・陶器 (4)



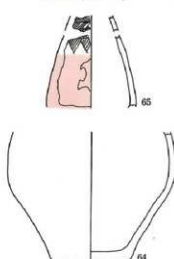
第2号溝址(59~62)



第3号溝址(63)



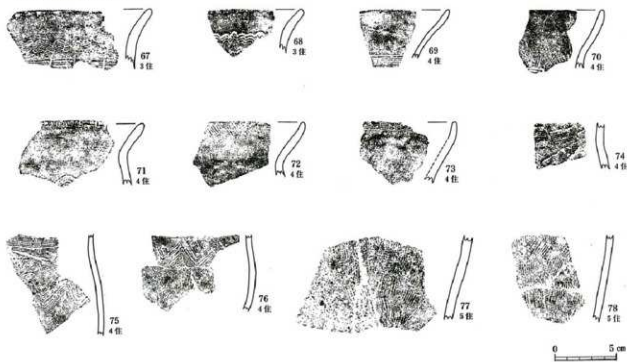
検出面(64~65)



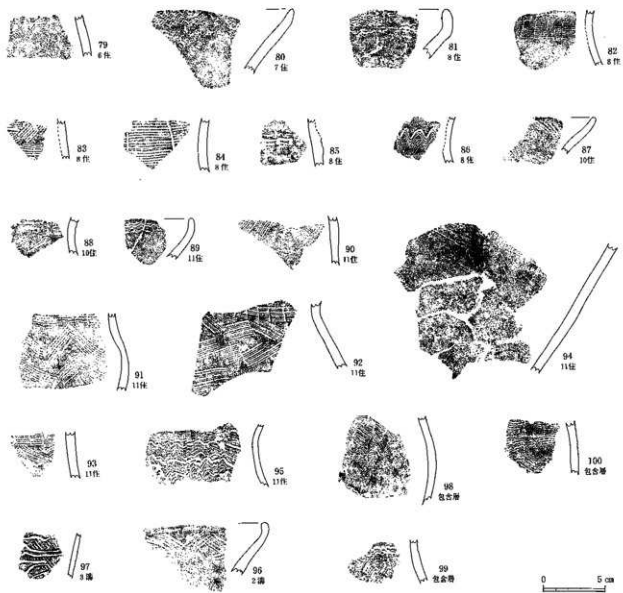
ミニチュア(66)



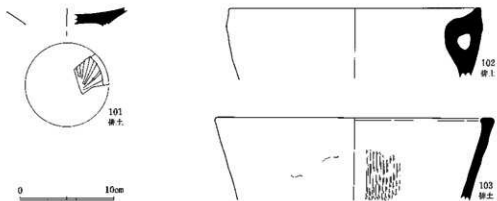
弥生土器拓影(67~100)



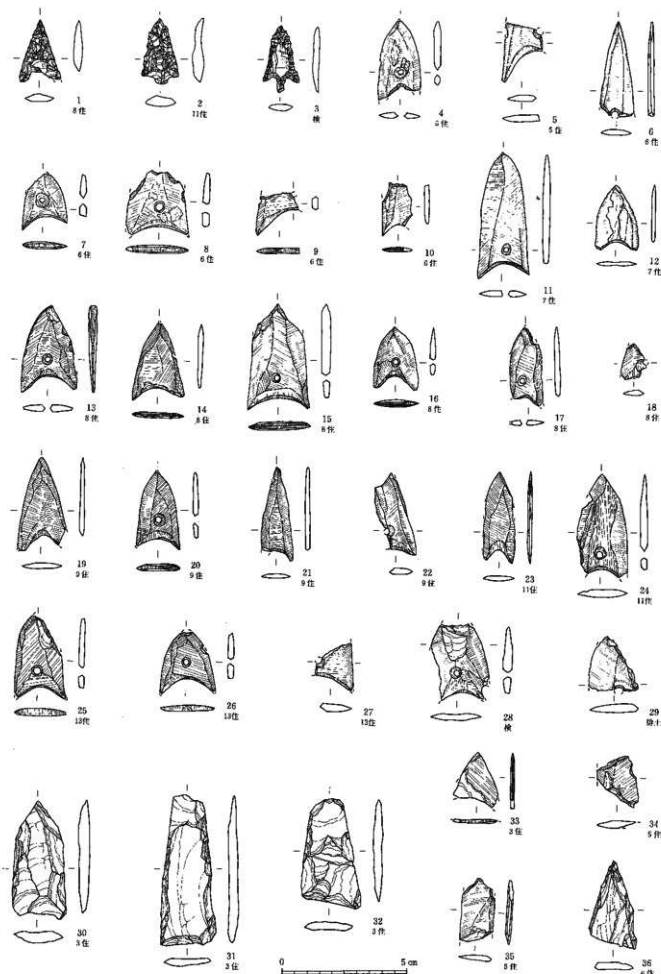
第18図 土器・陶器 (5)



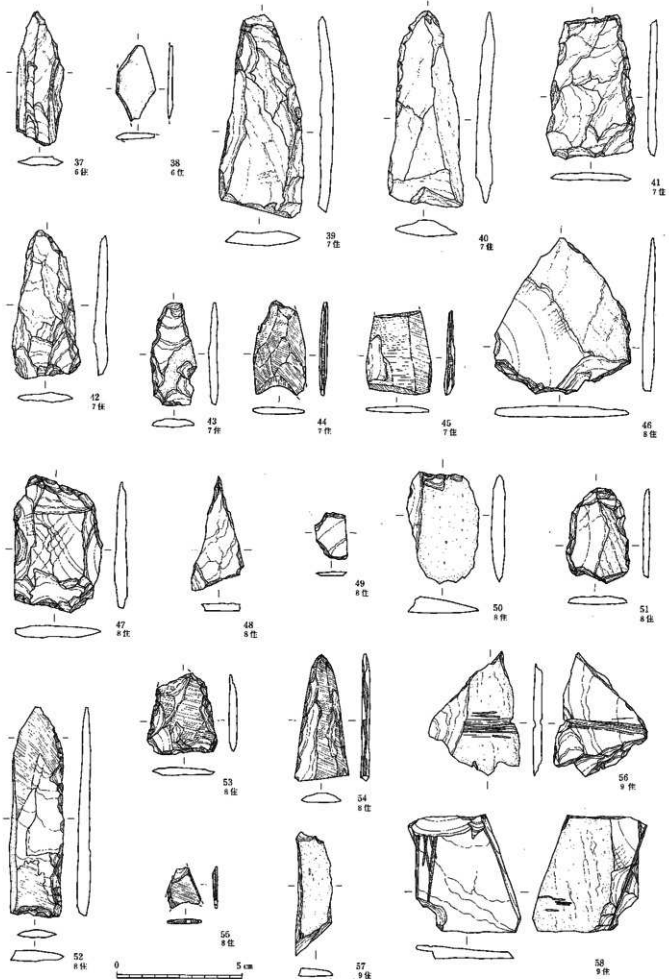
中世(101~103)



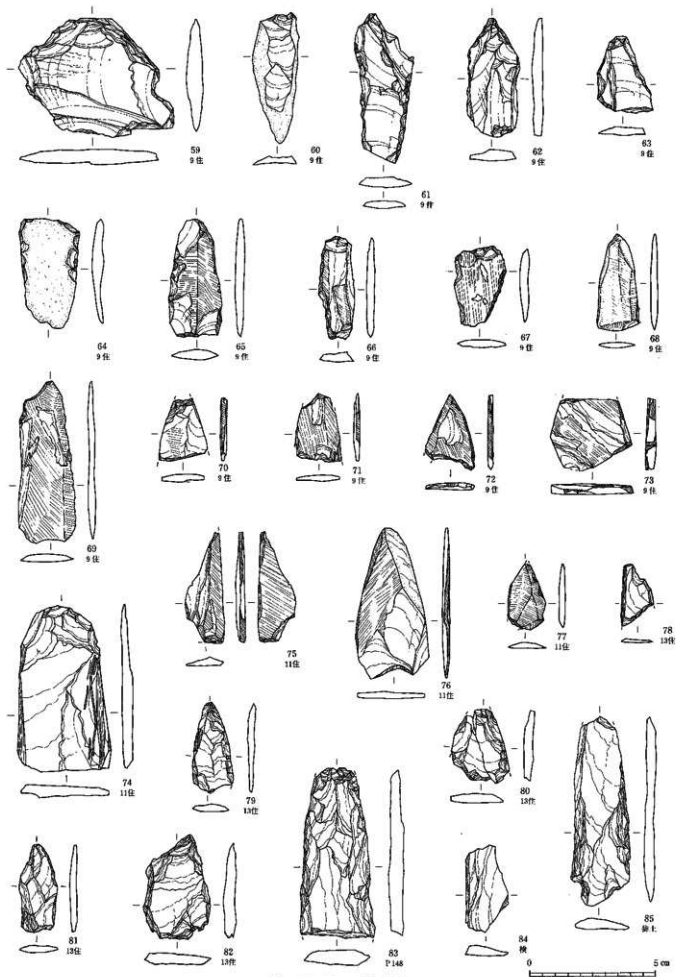
第18回 土器・陶器 (B)



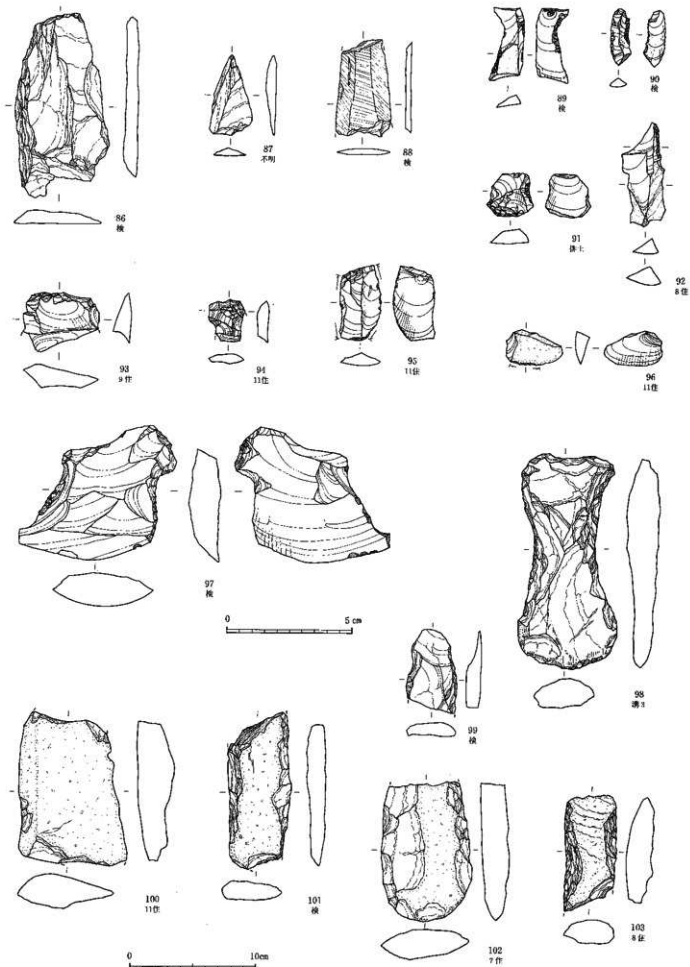
第20图 石器 (1)



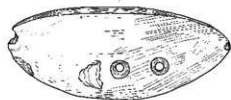
第21圖 石 器 (2)



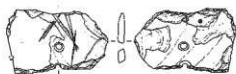
第22图 石器 (3)



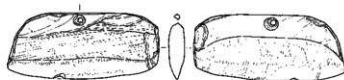
第23圖 石器 (4)



104
A坑



107
8坑



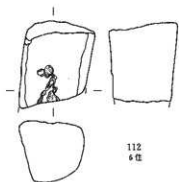
105
8坑



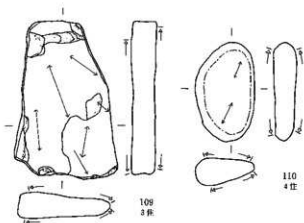
106
8坑



108
11坑

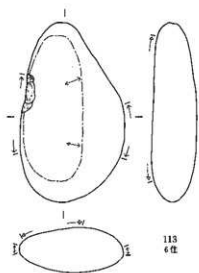


112
6坑

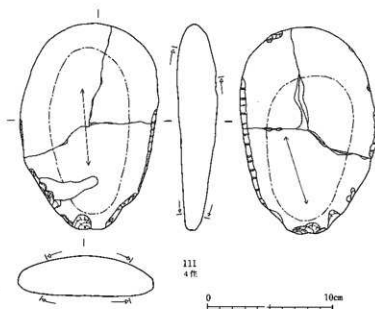


109
3坑

110
4坑



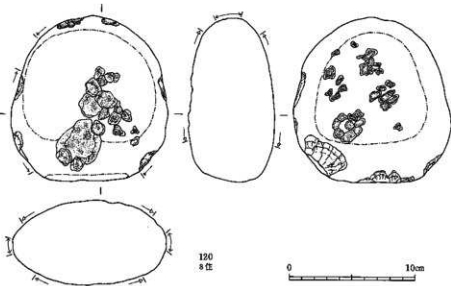
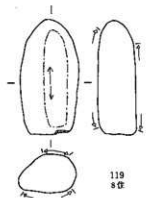
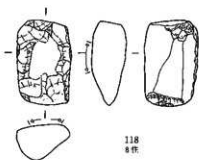
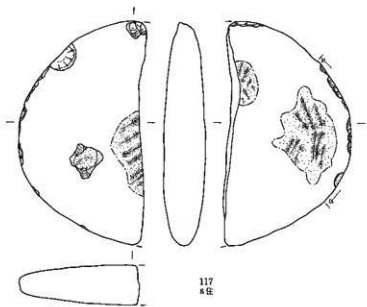
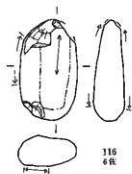
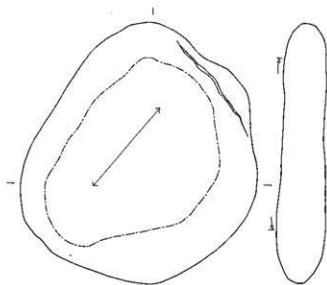
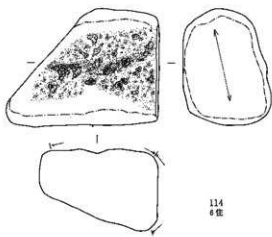
113
6坑



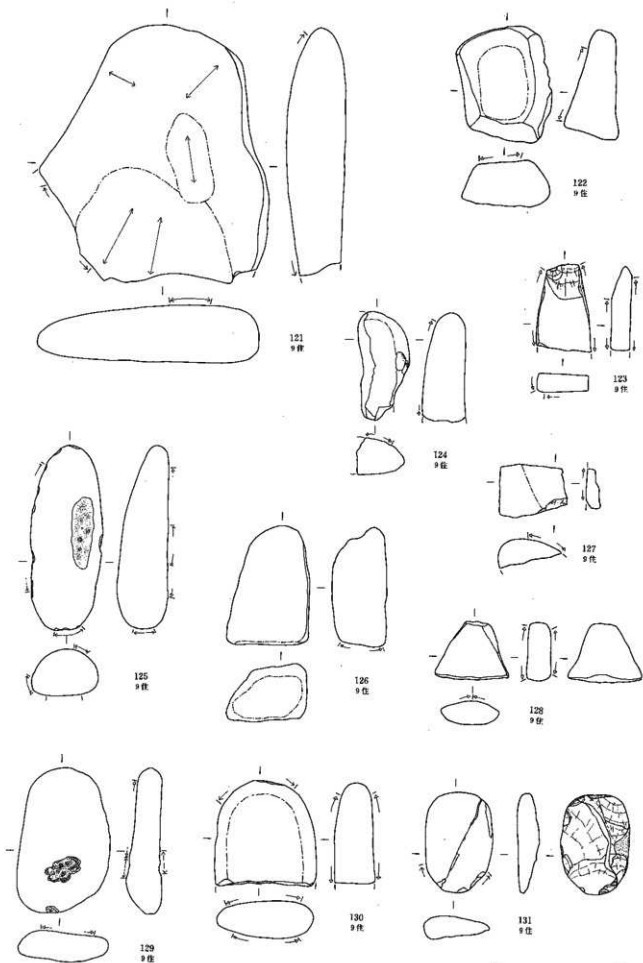
111
4坑



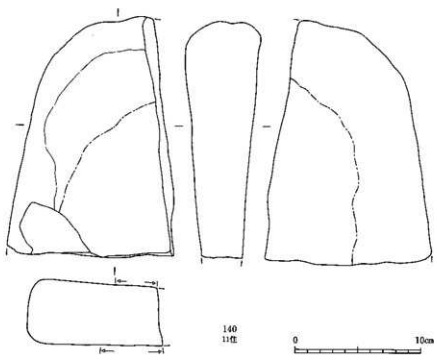
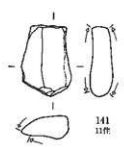
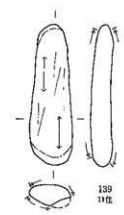
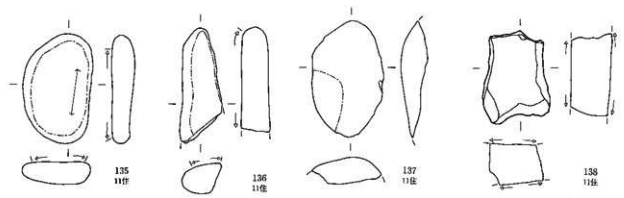
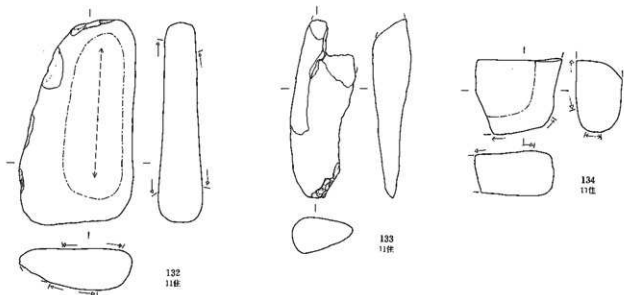
第24图 石器 (5)



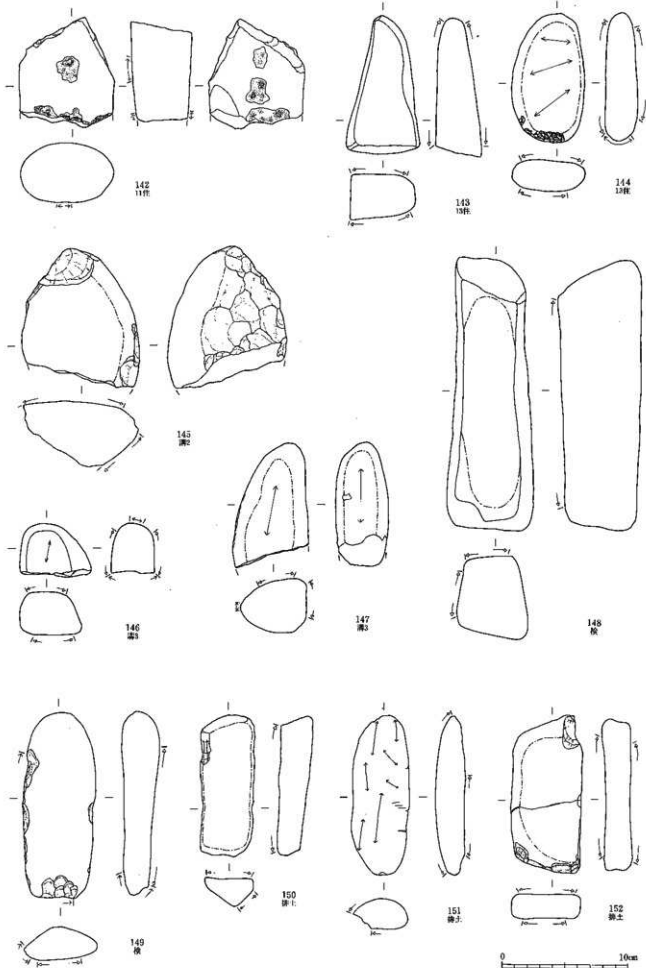
第25図 石器 (6)



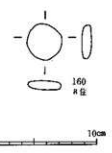
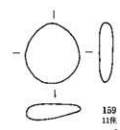
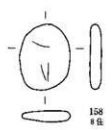
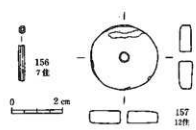
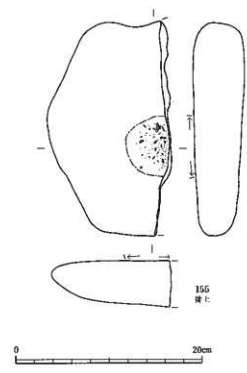
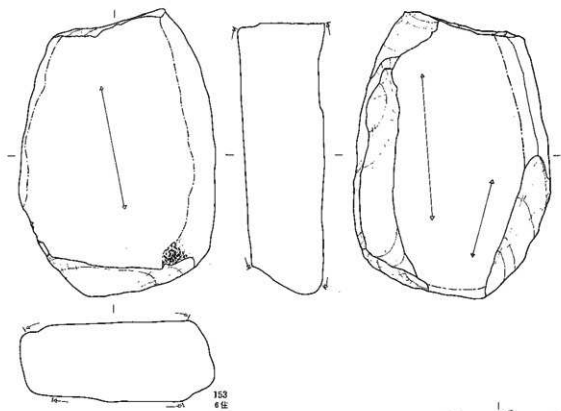
第26圖 石 器 (7)



第27回 石器 (8)



第28図 石器 (9)



第29图 石器(10)

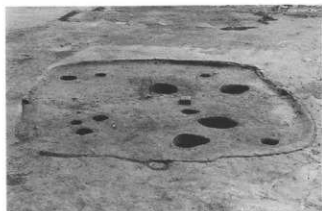
图 版



調査前(南西から、右手の森は諏訪神社)



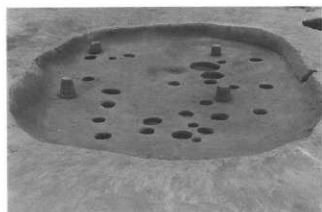
3住(左一右に1溝が切る、西から)



4住(西から)



5住(西から)



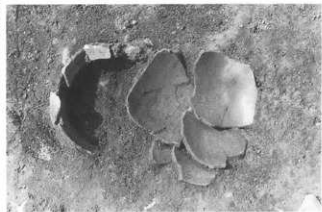
6住(東から)



8住(東から)



7住(東から)



7住炉(北から)



9住(東から)



9住土器出土状況(No.25)



10住(西から)



12住(東から)



11住(西から)



11住炉(新一左、旧一右、北から)



13住(東から)



14住(南から)



3建(南から)



7建、4建(手前から7建、4建、西から)



5建(西から)



6建(西から)



8建(南から)



9建(東から)



3溝(南から)



記念撮影



3

4住出土土器(3・4・7)



4



7



14



12

7住出土土器(12・14・16)



16



9

6住出土土器(9・10)



10

8住出土土器(17・19)

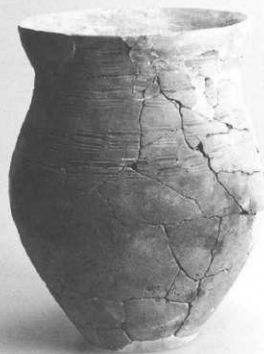


17



18

9住出土土器(26・28)



19



28



26

9
住出土土器
(23
、25
、29
、31
、34
、66)



31



30



29



34



24



25



23



66



42

11 住出土土器 (36, 38, 42, 45, 47)



32



45



37



47

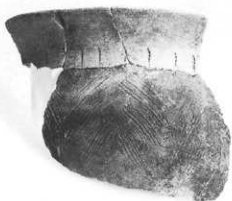


36

12 住出土土器 (50)



50



56

13
住出土土器
(52, 54, 56)



54



52

2
溝出土土器
(62)



62



63

3
溝出土土器
(63)

検出面及び排土中
(64, 102)



64



102



157

12住出土鈞錘車(157)



156

7住出土管玉(156)



30



31



32



33



4



5

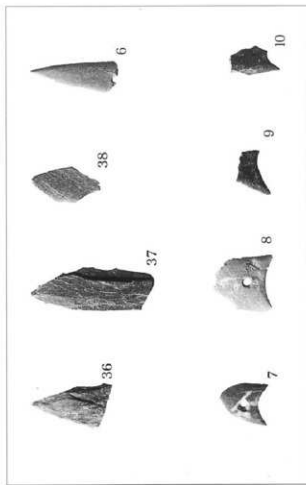


34

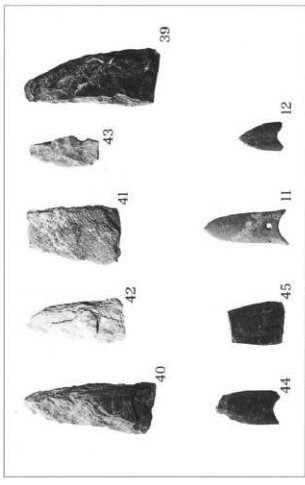


35

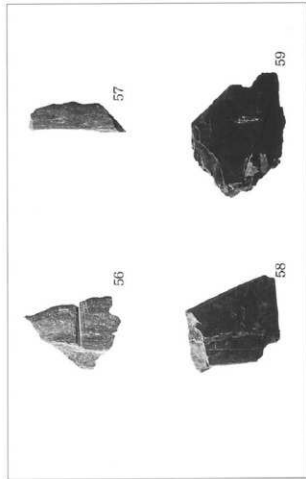
3住出土石器(30~33)、5住出土石器(4、5、34、35)



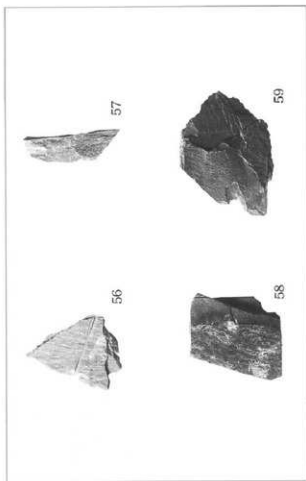
6住出土石器



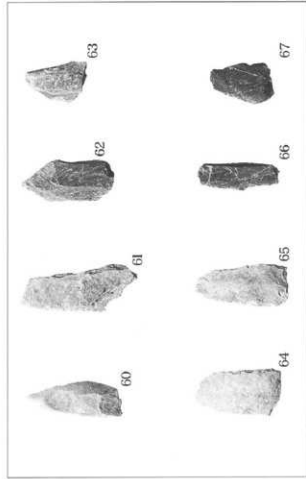
7住出土石器



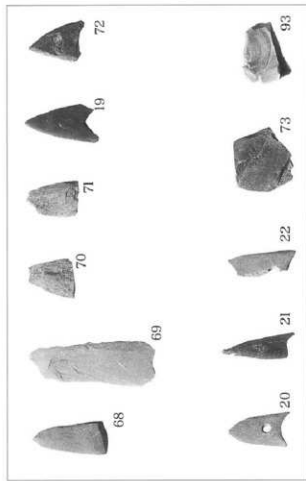
9住出土石器(56~59,表)



9住出土石器(56~59,裏)



9住出土石器



9住出土石器

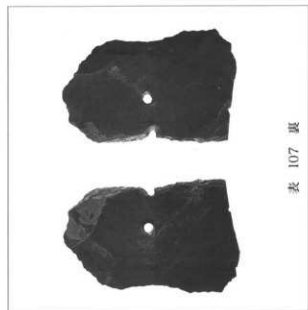


表 107 裏

8住出土石包丁(107)



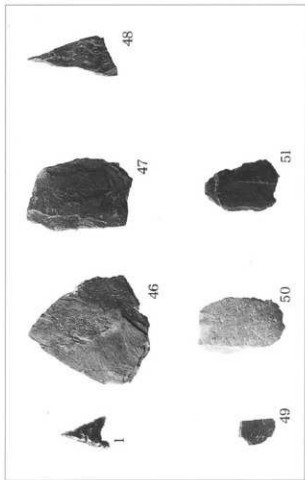
表 105 裏

8住出土石包丁(105)

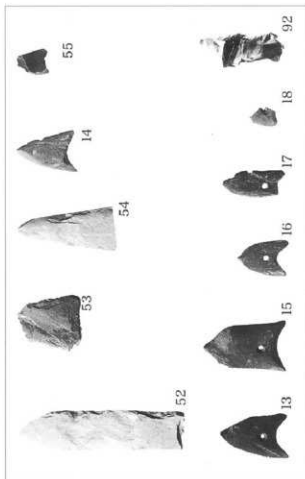


表 106 裏

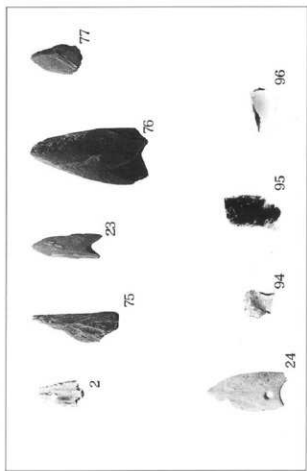
8住出土石包丁(106)



8住出土石器



8住出土石器



11住出土石器

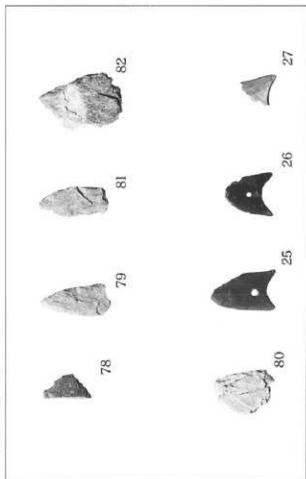
表 74 頁

11住出土磨製石鏃未成品(74)



表 108 頁

11住出土石包丁(108)

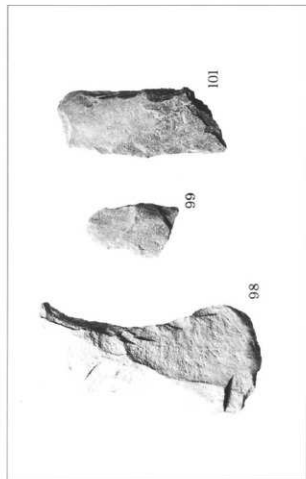


13住出土石器

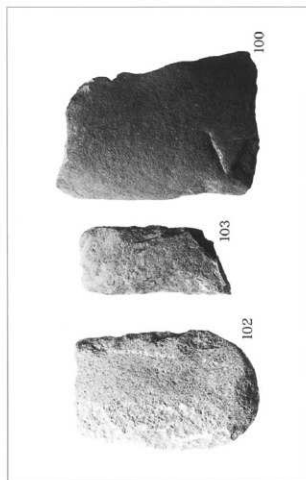


表 104 頁

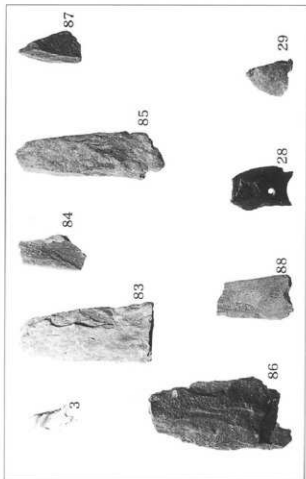
石包丁(104)



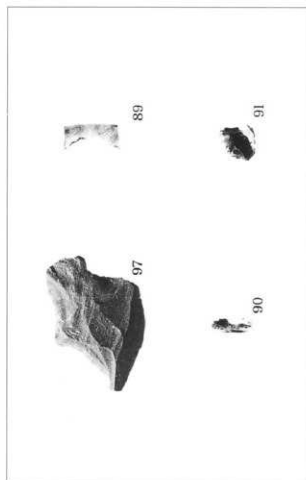
3住出土打製石斧(98)、検出面石器(99,101)



7住出土打製石斧(102)、8住出土打製石斧(103)、11住出土打製石斧(100)



P148磨製石鏃未成品(83)、検出面石器(3,28,29,84,86)、
排土石器(29,85)、不明磨製石鏃(87)



検出面石器(87,90,97)、排土スクレイパー(91)

竹洲遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	まつもとしのぶのけいせき Ⅱ さんきゅうほくつちようさほうこくしよ
書名	松本市竹洲遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No. 124
編著者名	澤柳秀利・竹内靖長・直井雅尚・村田昇司・太田守夫・近藤 潔
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）
所在地	〒390 長野県松本市丸の内3番7号（〒390 松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710）
発行年月日	平成8（1996）年3月21日（平成7年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
竹洲	ながのけんまつもとし 長野県松本市 ことぶきたちやうの 寿北6丁目	20202	315	36度11分36秒	137度58分32秒	19940606～ 19940831	3471	区画整理事業に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹洲	集落跡	弥生	住居址 12軒 掘立柱建物址 7棟 溝 址 3条 土坑 20基 ピット ——	土器・石器・土製品 (後期初頭) 陶磁器	弥生時代後期初頭の単 純集落址を検出。 岩製石鏃、石器の木成品 が大量出土。
		中世			

松本市文化財調査報告 No.124

松本市竹渕遺跡Ⅱ

～緊急発掘調査報告書～

発行日 平成 8 年 3 月 21 日

発行者 松本市教育委員会

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 総合印刷

